

台灣情報誌

交流

2014年7月 *vol.880*

公益財団法人 交流協会
Interchange Association, Japan

COMPUTEX 2014



交 流

2014年7月
vol. 880

目次

CONTENTS

新専務理事着任ご挨拶 ～台湾新幹線と裏千家北投支部の思い出～ (舟町仁志)	1
ウェアラブル関連製品に注目 ～Computex 2014レポート～ (吉村 章)	2
台湾の特色のある相声を探し求めて(前編) (戸張東夫)	15
【台湾内政、日台関係をめぐる動向】 ～第四原発の運用凍結、民進党主席選挙～ (石原忠浩)	21
岡山市・新竹市友好交流協定締結10周年記念「台湾新竹演劇公演」 (藤原康典)	28

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

● ● 交流協会について ● ●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

台湾新幹線と裏千家北投支部の思い出

交流協会専務理事 舟町仁志



7月1日から交流協会の専務理事に着任いたしました。よろしくご指導のほどお願い申し上げます。

私は、2006年6月から2008年7月まで交流協会台北事務所で副代表として勤務しました。任期の大半は民進党の陳水扁總統の時代でした。2008年3月の總統選挙で馬英九氏が勝利し、5月から国民党政権となり、まもなくして交流協会台北事務所も、池田代表から斉藤代表に、私から田辺副代表に、といった人事異動が行われました。

台湾での勤務時の最大の関心事は、台湾高速鉄道（台湾新幹線）が無事営業を開始することでした。着任時の局面は、建設工事はほぼ終了し試験走行が開始され運転速度を徐々に上げていくところでした。引渡し前の性能試験、引渡し後の台湾高速鉄道による習熟運転、営業認可を出すための台湾政府による最終試験といった関門が残っていました。ポイントで脱輪する事故が発生して、台湾新幹線の安全面を不安視する記事が新聞紙上に賑わせていました。何とか最終試験を通過して、2007年1月5日から運賃半額で仮営業運転が始まりました。当初は一日片道19本のダイヤで1時間に1本のペース、台北・高雄間約350kmを時速300キロ、最速90分で結ぶので、同じ線路上を走っているのは2編成でそれぞれ300km近く離れている、という事故など想定できない状況でした。それでも、フランス人運転手と台湾人車掌が英語でコミュニケーションを取りながら運転するという、飛行機張りの状況を不安視する声がありました。

現在では台湾人運転手がきちんと養成され、多い時間帯では1時間に6本走行するダイヤで日本の新幹線並みの密度になってきています。当時の騒ぎは杞憂に終わったわけで、台湾東部を除いて航空路線は鉄路に切替わり、台湾新幹線は台北と

高雄を結ぶ大動脈となりました。

副代表は経済以外の仕事もできるということで、それまでの役人生活では経験しなかった文化面での係わりもありました。北投温泉の奥に北投文物館という美しい日本庭園を持つ和風家屋があります。日本統治時代は佳山旅館として営業し、戦時中は出征する台湾兵士の別れを惜しむ場として使われたそうです。本館の二階には舞台付きの和風大広間、茶道用の炉を切った和室に水屋と台所が備わっています。毎月ここで日本から来る先生による裏千家茶道教室が開かれていましたが、長年の業績が認められ2007年12月に裏千家淡交会の北投支部（北投協会）としてスタートすることとなりました。私は茶道は不案内ですが、お声が掛かり顧問の一人として幹部名簿に載せて頂きました。おかげさまで2008年1月に呂秀蓮副總統が茶会に来られた時や、5月に日本から先代家元鵬雲斎大宗匠がお見えになった時に同席し、貴重な体験ができました。

北投協会会員には、大学の日本学科で日本語や日本文化を教えている先生方が多く参加しており、毎月日本から指導に来ている裏千家横浜支部の関宗貴名誉教授が、それらの学校まで足を運び指導されることもあると聞きます。今年は北投文物館での茶道教室が10周年を迎えます。10年間毎月当地を訪れ、茶道の指導に当たられてきた関先生のバイタリティには頭が下がる思いです。先生のご尽力もあり、北投支部の会員も順調に増えているとのことでした。

台湾新幹線と裏千家北投支部は、日本の先端技術と伝統文化ということで全くジャンルの違うものです。しかし私の駐在時に開花時期を迎え、その後時間をかけて台湾の中にしっかりと根付きました。台湾の皆さんの日本への強い関心、旺盛な吸収力、そして帰任から6年間の時間の流れを感じます。

ウェアラブル関連製品に注目

Computex 2014 レポート

Taipei Computer Association 東京事務所 駐日代表 吉村 章

■外国人バイヤー 38,662 人を集めての開催

2014 年 6 月 3 日（火）から 6 月 7 日（土）まで Computex 2014（コンピュテクス 2014）が開催された。出展企業は ASUS（華碩）、Acer（宏碁）、Gigabyte（技嘉）、MSI（微星）など台湾を代表する国内大手 IT ベンダーをはじめ、中堅・中小企業からベンチャー企業まで、出展規模は 5,300 小間、出展企業数は 1,700 社。主催は台北市コンピュータ協会（TCA）と台湾対外貿易発展協会（Taitra）による共同主催。世界の 166 の国と地域から 38,662 人の外国人バイヤーを集めて開催された。

世界最大の民生用電子機器見本市として有名なのはアメリカ/ラスベガスで開催される International CES（米国家電協会主催/1 月）、そしてドイツ/ハノーヴァーで開催される国際情報通信技術見本市は CeBIT（Deutsche Messe AG 主催/3 月）、このどちらも世界中の業界関係者が注目する見本市である。Computex は、この 2 つの国際的な IT イベントと肩を並べるほどに注目される展示会となった。世界の IT 業界にも大きな影響力を持つ。アジア最大の IT 見本市としても注目を集めている。

会場は台北の世界貿易センター展示場（信義区）と南港ホールの 2 つの地区。信義区では世界貿易センターの Hall 1、Hall 3、国際会議場の 3 か所。南港ホールは 4 階と 1 階のふたつのフロアを使って開催された。今年は MRT が信義地区の会場まで開通し、会場の地下に駅が設けられた。台北駅周辺からのアクセスがこれまでより格段に便利に

なった。

日本国内には Computex のように 3 万人を超える外国人がバイヤーとして集まる展示会は恐らくないだろう。世界中からバイヤーが集まる。国籍別では中国、アメリカ、日本、香港、韓国がトップ 5 の地域。シンガポール、タイ、マレーシア、ドイツ、ロシアと続く。そもそも Computex とは純粋な「トレードショウ」であり、海外から集まるバイヤーに台湾製品を売り込むための展示会。文字通り出展者と来場者（バイヤー）の間に「商談」が繰り広げられる。日本の展示会にありがちな「会場ではとりあえず資料収集・・・」、「トレンドを掴むために出展ブースを見て回る・・・」といった様子ではない。

出展する企業側は「Computex にブースを確保できるかどうか」（出展できるかどうか）、「Computex までに出展製品の準備が間に合うかどうか」（開発が間に合うか、量産にこぎ着けられるか）が企業の業績を左右するほど大きな問題。Computex の出展は毎年 10 月から受付を開始する。しかし、ブースはほぼ 1 か月ほどで完売。キャンセル待ちによる調整やエリアによる小間数の配分調整などを行っても年明け（会期の半年前）にはほぼ出展企業が決定する。

毎年、年明け前後に日本企業から「募集要項が欲しい」という問い合わせや「これから出展を申し込みたい」という連絡を受けることがある。残念ながら年明けではその年の Computex に間に合わない。翌年の出展をご案内することになる。もし、出展をお考えの企業の方がいらっしゃれば、



【写真 01】 出展規模は 5,300 小間、出展企業数は 1,700 社。外国人バイヤーは 166 の国と地域から 38,662 人



【写真 02】 写真は第 3 ホールの日本企業が出展するエリア。中堅・中小企業の日本企業が自社の技術力を売り込む。

できるだけ早めに（遅くても 11 月末までに）ご連絡いただきたい。（ippc@tcatokyo.com）

■ Computex を見る 3 つの切り口

「変わらない Computex」、「変化する Computex」、「半歩先端の Computex」の 3 つのキーワードを覚えておいていただきたい。Computex を理解するためのキーワードとして、まずこの 3 つの点について説明したい。

第一に、「変わらない Computex」とは、ひとことと言うと、世界中から集まるバイヤーが「定番製品」を買い付けるための Computex である。た

例えば、UEB メモリー、パソコンのケースやマザーボード、キーボードやマウスやタッチペンなどの入力デバイス、CPU クーラー、ストレージ、その他のパソコン周辺機器やアクセサリなど。トレンドによりデザインやスペックは毎年多少は変化するが、基本的には変わらない「定番製品」である。ここが Computex が最も Computex らしいところ。

「変わらない」と言っても製品はもちろん毎年のようにモデルチェンジされる。パソコンケースや CPU クーラーなどは毎回マニア向けに志向を凝らしたデザインが発表され、新しいモデルが続々と登場する。USB メモリーも毎年のように新しいデザインの製品がお披露目になる。

世界中から集まるバイヤーは「その年のクリスマス商戦で何が売れるか」という視点で製品探しに集まる。また、中国なら「国慶節」がコンシューマの消費が盛り上がる季節、日本なら「ボーナス商戦」というようにそれぞれの国や地域にとって異なる商戦の時期を意識した商談が行われる。つまり、Computex とは「売るモノ」（売れるモノ）を探し、タイムリーに買い付けていくための展示会なのである。

製品は決して最新技術の最先端の製品ばかりとは限らない。「定番製品」を買い付けていくことが台湾に来る一番の目的というバイヤーも少なくない。繰り返しになるが、ここが最も Computex らしいところである。

第二に「変化する Computex」とは、製品の最新トレンドを見る Computex である。これは必ずインテルとマイクロソフトがその年にどんなニュースを発表するか、どんな技術を発表するか、これが「鍵」となる。台湾の OEM/ODM ベンダーは量産パートナーとしてインテル・マイクロソフ

ト陣営の一翼を担っている。インテルやマイクロソフトのブースにはパートナーである台湾ベンダー各社の新製品やトレンドを先取りした製品がずらりと並ぶ。これが「変化する Computex」という意味である。

逆に、インテルやマイクロソフトからエポックメイキングな製品や新しい技術の発表がない年はさびしい Computex となる。Computex の注目度合いはインテルやマイクロソフトの動向にかかっているとと言っても過言ではない。

Computex 2012 では販売を間近に控えた「Windows 8」が注目製品となった。Computex 2013 では最新型のウルトラブックが各社から出

揃い世界中のマスコミやバイヤーから注目を集めた。今年は Intel の次世代 Core プロセッサの中で低消費電力モバイル向け製品である「Core M プロセッサ」について、インテルがサムソンとの協業で開発を進めている 4K 液晶ディスプレイについて、ASUS の 4K ノート PC などが注目を集めた。

三つ目は「半歩先端の Computex」についてである。これは技術出展や製品のプロトタイプの出展、またはこれまでとは違った新しいコンセプトの製品や応用技術を活かした製品の出展など、ちょっと進んだ技術や製品トレンドを見る Computex である。



【写真 03】「定番製品」の買い付けに世界中からバイヤーが集まる。クリスマス商戦に向けて製品を買い付け。



【写真 05】インテル、マイクロソフトの出展製品やカンファレンスでその年の Computex のトレンドが見えてくる。



【写真 04】世界中のバイヤーが買い付けに集まる。グーグルグラスを着けたバイヤーはリアルタイムで Computex を実況（？）



【写真 06】ASUS の最新型のノートパソコン。海外のバイヤーもまず注目するのは ASUS の新製品だ。

これらの製品は Smart Technology Applications & Products エリア (通称「スマテク・エリア」)に出展される。今年は信義区の第3ホールに10のテーマパビリオンが集められ、「スマテク・エリア」が設けられた。

日本人記者からの感想で「思ったほど目新しい技術がない」、「先端技術に欠ける」というコメントを聞くことがある。日本の大手ベンダーからも「弊社にもある技術」、「この技術はすでに一般的・・・」、「台湾はまだまだこの程度か・・・」といった声も聞くことも・・・しかし、こうした見方はある意味で Computex の「本質」を理解していないコメントだといえる。

実は、Computex に出展されるこれらの技術やソリューションは、必ずしも革新的な最先端技術というわけではない。最先端の技術が結集された製品や高付加価値の製品というよりは、実用可能な先端技術の応用や製品を量産化するところに台湾企業の「強み」がある。

つまり、「最先端」ではなく「半歩先端」、「未来の革新的な技術」ではなく「いまビジネスに最も近い実用先端」の技術なのである。これは Computex を視察するときの注意点である。展示会で本当に最先端技術を見たければ、アメリカの CES へ行くべき。または日本の CEATEC でも見ることができる。

Computex の技術は製品化や量産化を控えた「キーテクノロジー」であり、具体的なビジネスチャンスを生むビジネスの最前線にある技術である。逆に言うと、寝かせておくとすぐに陳腐化してしまう技術でもある。技術アライアンスのコーナーでは売り込み競争も熾烈であり、買い付け側の動きも速い。Computex は製品調達やパートナー探しの商談の場であり、さまざまなビジネスチャンスが交錯するビジネスの最前線といっても

いいだろう。

第3ホールに設けられた「スマテク・エリア」(Smart Technology Applications & Products)の10のテーマパビリオンは以下の通り。今年の Computex では特にウェアラブル (Wearable) に注目が集まった。このレポートの後半では COMPUTEX 2014 に出展されたウェアラブル関連製品をレポートする。

◆ Computex 2014 Smart Technology Applications & Products

Smart Wearable device



【写真 07】第3ホールの Smart Technology Applications & Products エリア。写真は3Dプリンターの出展ブース。



【写真 08】Smart Technology Applications & Products の10のテーマ。今年、最も注目を集めたエリアが第3ホール。

3D Printer

Internet of Things

Security Solution

Display Technology

Energy Supply Management

Intelligent Vehicle System

Education smart learning

Cloud Applications

Medical & Health Care

(1) ITRI (工業技術研究院) はインテリジェントグラスを出展

ITRI (The Industrial Technology Research Institute/工業技術研究院) ではインテリジェントグラス (通称「ITRI グラス」) の開発を進めている。Computex 2014 にはプロトタイプを出展。注目を集めていた。第3ホールの「スマテク・エリア」(Smart Technology Applications & Products) では、インテリジェントグラスと3Dスキャナーを展示し、このコーナーには常にたくさんの来場者が集まり、体験デモを待つ人で行列ができるほどだった。

工業技術研究院とは国策的に設けられた国の研究開発機関で日本の産業技術総合研究所に当たる機関。インテリジェントグラスは独自技術でゼロからの開発を進めている。詳細な仕様は発表されていないがかなり完成度の高い試作機。実際にかけると軽量でちょっと大きなメガネといった感じで大きな違和感はない。グーグルグラスよりはがっしりとした作り。アンドロイドOS、バッテリーはコードでポケットに、会場ではジェスチャーコントロールのデモを行っていた。

担当者によると本機は試作機でこれから各種の応用分野でのアプリ開発を進めていきたいという。分野的には「医療、教育、ゲーム、観光など。具体的には美術館での利用などを考えている」と

の説明。「他にも両手が自由になることで業務がしやすくなる現場でいろいろなアプリケーションが考えられる。医療の分野で注目を集めているが、手術といった高度医療だけでなく、看護師や介護士など衛生面での気配りが必要な現場での日常の業務として使うことを考えていきたい」とコメントする。

「教育の分野でも応用できる。両手を自由に使うことができると何ができるか可能性は大きい」、「もちろんエンターテインメントの分野での応用も可能」、今後、民間レベルで実用的なアプリケーションの開発が鍵になるとのコメント。



【写真 09】ITRI の独自開発によるインテリジェントグラス。国の研究機関が開発に乗り出した。



【写真 10】民間へのライセンス供与、または開発スタッフのスピンオフを奨励。開発技術を積極的に民間へ。

ITRI は民間の開発を支援するのではなく、民間へのライセンス供与、または、開発に携わったスタッフによる創業が目的。研究者を積極的にスピノフさせることが研究成果につながると考える。逆に、実業につながらない技術開発や研究者がスピノフできずに長い間研究機関に留まることは、研究成果がないとみなされる。ブースでは試作機の PR に熱が入る。こんなところにも日本の研究機関との違いを感じる。

(2) パソコン最大手 acer がウェアブルに市場参入 リストバンドタイプ「Liquid Leap」をリリース

台湾パソコン大手、IT 業界をけん引する acer が発表したリストバンド。製品名は「Liquid Leap」、acer がウェアラブル関連製品を発表するのはこれが初めてだ。南港ホールの上フロア（4F）はインテルやマイクロソフトが陣取る Computex の中でも花形のホール。ASUA や MSI などと同じエリアに競い合うように出展している。自社初のウェアラブルはブース内で決して派手さはなかったが展示ホールのメイン製品を出展するコーナーの一角に存在感をもった展示がなされていた。

横長タイプの1インチディスプレイをラバー製のリストバンドに組み込んだデバイス。ディスプレイはタッチ対応、画面をクリックすると歩数や歩行距離、消費カロリー、睡眠サイクルなどが表示される。Bluetooth 4.0 でスマートフォンとの接続、電話や SMS の着信が通知される。音楽再生のコントロールも可能でジョギングやスポーツクラブなどで音楽を聴きながらのトレーニングにも便利。IPX 7 の防水性能を備え、一回の充電で最大7日間の使用が可能。

色はたいへんカラフル。女性を意識してかアクアマリン、ピンク、オレンジといったバリエーショ



【写真 11】製品名は「Liquid Leap」、acer 初のウェアラブル関連製品。秋には市場に投入予定。



【写真 12】アクアマリン、ピンク、オレンジといったカラフルなデザインで女性を意識した製品作り。

ンがあり、シンプルなホワイト、ブラックもラインナップ。バンド幅は 17mm と時計サイズでは平均的なサイズ。個人的にはディスプレイの使用をもっと割り切り、デザインをもっとシンプルにして幅がこの半分程度になるとよりベターと思う。常時腕に着けていて気にならない重さと形にしてほしいところ。スマホのアラーム機能としての使用に割り切るか、ディスプレイの操作性を考えた製品にするか、基本的に目指すべきところが違うわけだが、どちらかへの割りきりが必要であり（個人的な意見）、この点がマーケティングの難しいところなのだろう。

2014 年第 3 四半期にまずヨーロッパ市場に投入予定。価格はユーロ 99 以下(約 14000 円以下)、日本での販売は未定とのこと。日本での発売と発売価格、ビジネスモデルに興味に注目していきたい。

(3) パソコン大手/老舗の MiTAC もウェアラブルに参入。リストバンドタイプの「MiWell」を出展

リストバンドタイプの「MiWell」は、独自のアルゴリズム解析を使って心電図の分析を行い、2 分以内という短い時間で体と精神的なコンディションを診断。プレッシャー指数や数値上の生理的年齢、エネルギーバランスなどをモニターに表示する。

モーションセンサーの技術により就寝モニターで寝返りや睡眠の質を分析したり、トラッキングでの消費カロリーや行動量などを分析したり、さまざまな機能が盛り込まれている。まず、目が覚めたときに睡眠の質を測定する。さらに通勤から退勤までの一日の活動状況、歩く歩数と距離、階段の上り下り、カロリー計算、職場での仕事量などを測定。一日の総合的な判断から「健康指数」を判断する。さらに、退勤後は一日の行動を振り返り、予め設定してある目標が達成できているかどうかを表示することもできる。電池の持ち時間は一週間。

交感神経と副交感神経のバランスを「見える化」して本人のリラックス度、緊張度がメーターで表示される点も特徴のひとつ。実年齢に対して体のバランス年齢がいつでもチェックできる。また、スマートフォンのアプリでは呼吸法のトレーニングや健康を維持して元気を保つアプリなどを利用することもできる。

MiTAC はヘルスケア分野でのウェアラブル市場にターゲットを絞り、製品開発を行ってきたこ



【写真 13】交感神経と副交感神経のバランスを「見える化」し、本人のリラックス度と緊張度をチェックして表示する。



【写真 14】ヘルスケア分野にターゲットを絞る。睡眠を専門に研究を行っている医療機関とのコラボにより共同研究。

とが特徴のひとつ。開発にあたっては睡眠を専門に研究を行っている医療機関とのコラボにより共同研究を実施。独自のアルゴリズムを活用した EKG 心電計と HRV 心拍変動解析は医療機関との研究成果による。

また、デザインは寝ている間でも着けていられることにこだわった。当初はウォッチタイプも同時開発を行っていたが、やはり大きさという点で常に身に着けていることが難しいとの判断で、リストバンドタイプの開発に絞り込んだという経緯がある。日本市場は ODM でのビジネス。自社ブランドにはこだわらない。

MiTAC International Corp は 1982 年に創設。台湾では業界のリーダー的存在。グローバルネットワークを通じた電子製品の R&D、設計、製造、組立サービス業務を提供。幅広い分野で OEM から ODM までの生産代行を行う EMS 企業である。

(4) トレーニングコンディションをアドバイスするウェアラブルスポーツギア「GOMORE」

boMDIC 社が開発した「GOMORE」はリストバンドタイプではなく、ベルト型で体にフィットさせる方式の端末。これは体に巻きつけて直接フィットさせたほうがノイズを拾わない安定した測定でき、さらに「身に付ける」ことでよりいっそうの体へのフィット感を持たせるためという。製品ポスターには「MANEGE YOUR SUTAMINA AND GOMORE」というキャッチコピー。このコピーが示すように主にスポーツを楽しむ人を対象とした専用のヘルスギアで、心拍数や心電図などのデータから体のコンディションを分析してユーザーに知らせる。

boMDIC 社の製品でたいへんユニークなのがユーザーに対するインターフェイスで画面への表示方法。写真のような顔をデザインしたスマイル



【写真 15】ベルトタイプは体に直接フィットさせてノイズを拾わない安定した測定ができるのがメリット。

計が画面に表示され、スポーツ時やトレーニング時のコンディション、エネルギー充填度、疲労度、達成感などがモニターできる。必要に応じて休憩が必要なタイミングやスポーツ時には水分補給のタイミングなどを知らせるという。このインターフェイスは今後も改良を続けていくという。「遊び感覚で cool なデザインをユーザー側が設定できるようにになったらおもしろい」とも話す。

「この機器のビジネスモデルは？」という質問に対しては、多少歯切れの悪い答え。「基本的に『GOMORE』というブランドを大切にしたい」というコメントだが、キャリアと組む月額課金方式なのか、販売後にサイトでユーザーを囲い込みサービスを提供するクラウド方式なのか、または何か別の方法を考えているのか、単純に販売だけ(?)なのか、どうも歯切れが悪い。しかし、インタビューをしていて気づいたことがあった。

実は彼自身がトライアスロンの選手。つまり、自分がスポーツをやっていて欲しいと思った機能を開発してきた結果、「GOMORE」になった(「GOMORE」ができちゃった)ようだ。boMDIC 社は大学のベンチャーで 3 人から立ち上げたスタートアップ企業。担当者は「将来はトライアスロンの選手向けにトレーニング計画をアドバイスしたり、さまざまなスポーツの普及や選手の育成に役立つ製品に育てていきたい」と夢を語る。

「この『GOMORE』という製品はあくまでも私たち目指すサービスを提供する方法のひとつの手段であって、私はマラソンやトライアスロン、自転車競技などを目指す人たちを応援していくことをライフワークにしていきたい。これが製品を開発した PURE な動機です」と話してくれた。

つまり、ビジネスになるかならないかではなく、「自分たちが欲しいものを作ってきた。自分たちが欲しいものは必ずみんなも欲しいと思っている



【写真 16】写真の彼自身がトライアスロンの選手。自分たち欲しいと思ったモノを商品化してきた。

はず」、このシンプルな考え方が彼らの情熱を動かしているのだ。

アジア IT ビジネス研究会 (<http://www.asia-it.biz>) でウェアラブルのセミナーに講師として招いた『スティーブ・ジョブズがデザインしていた未来』(総合法令出版)の著者である川北蒼氏(かわきた・そう)がセミナーでこんなことを話してくれた。「これからの時代は大企業がマスプロ向けに製品作りをするのではなく、マニアが自分たちが使いたいものを形にする製品作りが主流になる。そこでは事業採算性よりも突出した知識と技術を持ったマニアの『情熱』が原動力となる」、まさにこのコメントを裏付けるインタビューだった。

アメリカでは今年9月からサービスイン。日本でも年内にはサービスを開始したい意向。当面日本はiOS仕様を提供する予定だ。同時にAndroidタイプの開発も進んでいて、できるだけ早い時期に市場に投入したいという。基本的には独自ブランドによる市場に参入する戦略で現在のところOEM(相手先ブランドによる販売)は考えていない。

(5) Guidercare 社が開発した「Care Wacth」は

「お年寄りの見守り」をテーマとした製品

Guidercare 社が開発した「Care Wacth」は「お年寄りの見守り」をテーマとした製品である。「お年寄り」にターゲットを絞り、ビジネスモデルの設定から製品開発を始めたことが特徴。ヨーロッパではすでにサービスの提供を始めている。

独自のセンサーにより脈拍、血圧、血糖値といったデータを収集してアプリにアップロード。家族や介護人(見守る側の人)はお年寄りのコンディションを常に確認することができる。また、GPSモジュールを内蔵し、散歩に出かけたお年寄りの現在地の確認や散歩の軌跡、さらに家を飛び出して徘徊するお年寄りを追跡することもできる。お年寄りの徘徊対策機能、子供の迷子防止機能が備わっていることも特徴のひとつだ。

血圧の測定は指に装着できる小型の血圧計を使用。より正確に血圧を測定したいときには通常の血圧計を接続して使用することもできる。データは介護人向けや家族向けにサービスメニューを選択することによって転送が可能。主治医向けにデータ送信し、情報を共有することもできる。薬の飲み忘れを知らせるアラーム機能もある。

開発者は自らこうコメントする。「弊社の製品はお年寄りと子供向けに特化した製品開発を行っています。スポーツでの利用にはフォーカスしていません」という点を強調。「一般的には必要のない機能(使用頻度の低い機能)をたくさん盛り込んで、『何でもできる』(多機能/高付加価値)をPRするケースが多いが、弊社の製品はシンプルにお年寄りと子供に使って欲しい商品です。多機能ではなく、逆に無駄を削ぎ落とすことで使い方ができるだけシンプルな製品作りを目指しています」とコメントする。

「お年より向け」を裏付けるように充電器もユニーク。時計に充電コードの端子を差し込むので

はなく、本体を覆うカバー付きのドッキングステーションのような形だ。時計を充電器に装着して、カバーを閉めると自動的に充電が始まり、充電が終了すると音声アラームでお年寄りに知らせる。

一般的に USB での充電方法はお年寄りや子供は使いにくい。これならコードを装着するときその向きを気にしながら行う細かな作業がなく、お年寄りでも子供でも誰でも簡単に充電ができる。充電は2時間で完了。1回の充電で3～4日間は使用可能。仮に GPS 機能をフルに使っても充電なしで2日間はもつ。

「非常ボタン」も特色のひとつ。ボタンを押すと瞬時に介護人（介護をする側の人）の電話にこの端末を持っている要介護者の位置が伝わる。通話機能によって会話もできる。つまり専用のホットラインを内蔵。（2G チップなので日本国内では使えないが）また、緊急用の「SOS 警報」を発したり、要介護者が置かれているコンディションが介護人にダイレクトに伝わる。

「Care Wacth」はヨーロッパではすでにサービスを開始している。SIM カードとのパッケージプランでアプリ利用料を徴収することが基本的なビジネスモデルだ。台湾でもサービスを開始。6月30日までの限定でモニター募集も行っているという。日本でのサービスについては「詳細は説明できないが、各種認証の問題やキャリアとの折衝など現在進行中である」という。「日本国内だけでも300万人～400万人規模の潜在的な市場がある。ぜひ日本でのビジネスを実現させたい」と担当者のコメント。たいへん前向きな姿勢だ。

この製品に関して個人的には「電話ができる機能」に注目している。Guidercare 社の「Care Wacth」は腕時計が電話機の機能を持っている。時計の裏側に SIM カード用をセットすることがで

き、腕時計型の電話機として利用することができる。「流星号」（スーパージェッター）や「ジャイアントロボ」が呼べる通信機能を持っているのだ。子供のころこんな時計が欲しかった。（実際に電話をしても「流星号」は来ないが・・・）

実は、時計型の電話機は技術的にはだいぶ前から実現可能だった。実際、エプソンは1998年の長野オリンピックのときに「時計型電話機」(PHS)を市販している。問題はその使い方……。結局のところ時計型の電話は普及しなかった。ニーズがなかった(?)のか、使い方の提案ができていなかった(?)のか、さまざまな理由があるだろ



【写真17】お年寄りや子供向けに特化した製品開発を行う。一般的には必要のない機能は省いてできるだけシンプルに。



【写真18】GPS 機能でお年寄りの見守り。位置確認、緊急ホットライン、薬を飲む時間を知らせるアラーム付き。

う。

これは携帯電話にテレビ電話機能が付いたときも同じだ。誰もが「未来のものと思っていたテレビ電話が現実のものに・・・」と思ったが、結局のところ普及はしなかった。電話で会話をするときには相手の顔を見る必要がなかった。電話機は電話機で音声通話ができればよかったのである。さらにコミュニケーション手段は音声通話から文字チャットになり、TV 電話の必要性はますます遠退いている。ハイテク、高付加価値など機能から入るお仕着せの便利さではなく、ユーザーが求めている真の便利さに耳を傾けなければどんどん取り残されていく。日本企業はもっとアジアの市場を見るべきだろう。

(6) フレキシブルに曲げるとができる厚さ 0.36mm の薄型リチウムセラミックバッテリー

第3ホールのスマテク・エリアではPROLOGIUM社の薄型リチウムセラミックバッテリーがひととき注目を集めていた。フレキシブルに大きさ、形などが変えられる電池である。使い方、組み込み方など極めて自由度が高い。たとえば、腕時計のベルトの中に組み込む。担当者の説明によると「20,000回の折り曲げ耐久テストを実施済み」だという。ブースでは耐久性を計る検査機器を持ち込んで、実際に押し曲げ試験をデモしていた。

また、スマートフォンのケースの中に組み込めば電池を追加したことを意識させずにスマートに端末を持ち歩くこともできる。会場には薄型リチウムセラミックバッテリーを組み込んだスマートフォンのケースがサンプルとして展示されていた。接続部の端末にマッチするようにケースに端子が埋め込まれて、このまま商品化されてもおかしくないほどの完成度だ。

この自社技術で開発したFLCB (FPC Lithium-Ceramic Battery) は「安全性」にも十分に配慮されている。曲げても液が漏れない(固体の電解質を使っている)、燃えない(発火しない)、高いところから落としても、ハンマーで叩いても、ニードルのようなもので突き刺しても大丈夫、衝撃にも強い、はさみで切ってもそのまま使い続けることができるなど。ブースではサンプルの薄型リチウムセラミックバッテリーを実際にはさみで切ってみるデモを行っていて、デモを見た人は驚いた表情で視線を注いでいた。

「電圧のコントロールは独自IC技術で制御。通常は2.4V~4.2V充電電圧であるが、たとえ6~30Vの電圧をかけても発火したり、煙を出したりすることはありません」と担当者。安心、安全を特に強調していた。充電は「500回から800回ほど繰り返し使用が可能」だという。

確かに自由に折り曲げることができるという点はさまざまな分野で使うことができるだろう。時計のベストだけでなく、スマートフォンやebookにも適している。外付けのバッテリーとして手袋や帽子、ベルトや靴、そして衣類に組み込めば身につけた(wearable)のあらゆるものから電力が供給できるようになる。

バッテリーは今後ウェアラブル端末を進化させていく上での重要な課題のひとつ。現在のグーグルグラスはカメラ機能をフルに使うとバッテリーの持ち時間はおよそ1時間。1時間使うための充電には2時間が必要。これではまだまだ実用的とはいえない。セイコーエプソンの「MOVERIO」は外付けタイプで使用可能時間は6時間だが、グラスとバッテリーをコードでつないで、バッテリーをポケットに入れて使うのは決してスマートとはいえない。

バッテリー技術の革新はウェアラブル端末の今



【写真19】今年の Computex BC (Best Choice) AWARD を受賞。曲げても、切っても使えるセラミックバッテリー。



【写真20】バッテリー技術の革新はウェアラブル端末の今後を左右。ウェアラブル分野で日本からの技術出展も歓迎。

後を左右する重要な要素のひとつといえるだろう。(バッテリー技術に「強み」を持つ中小企業の皆さん、その技術を台湾に繋ぎます) いろいろな技術が結集すれば端末は確実に進化するはず。日本企業のように「垂直統合」によるモノ作りにこだわることなく、「強み」を持つ企業がその「強み」を活かして分業する。台湾は水平に広がる企業と企業の連携とセンサー技術や IC 技術、モジュールや基板の開発、そしてそれらの量産技術、裾野の広いサプライチェーンに「強み」を持っている。「水平分業」のネットワークを持っていることが台湾ベンダーの「強み」なのだ。

(7) Computex 2014 で出展されていた唯一の民

間企業開発のインテリジェントグラス

CHIPSIP 社の「SiME」は Computex 2014 で注目を集めた製品のひとつ。台湾ベンダーが開発したインテリジェントグラスだ。CHIPSIP 社はこれまでデジタルカメラ用のカメラモジュールやチップセットの開発を手がけてきた。インテリジェントグラスは完全にオリジナル技術で開発にとりかかった。単眼式のスケルトンタイプで、グラスの右側にコントロール部があり、トランスパレントタイプのディスプレイ (1280 × 720)、OS はアンドロイド 4.2、Wifi、ブルートゥース 4.0、GPS モジュール内蔵。構造や操作方法は ITRI グラスによく似ている。

話を聞かせてくれたのは總經理の George Tai 氏。「インテリジェントグラスは先端的な医療の分野ではすでに実用化が進められている。しかし、システムで数千万円から数億円もするような高度な医療機器の分野ではなく、医師だけでなく看護師や介護士がもっと身近な業務の現場で使える端末の開発を目指している」という。「現場で使う (人が使う) IOT」にこだわり、インテリジェントグラスの開発に着手した。

製品名である「SiME」とは See me (私を見て) を意味する。「グラスで見たものがそのままモニターに映像として映し出される。モニターを通じて現場の状況を共有でき、まずは情報収集端末としてさまざまな用途が考えられる。まずこの機能を重視する。建物や橋の検査、水道や電気など公共設備の点検、地質の調査など、専門家が現場に行かなくても現場の状況がリアルタイムで確認し、分析ができる。遠隔地からの指示や注意喚起も可能。防災の分野でも需要があるはず」と熱い思いを語る。さまざまな人に使ってもらいたいという思いがひしひしと伝わってくる。

また、開発担当者は「両手が自由になることで



【写真 21】CHIPSIP 社が発表したインテリジェントグラス「SiME」のプロトタイプ。完全オリジナル技術で開発。

どんなアクティブなことができるようになるか、可能性にチャレンジしたい」とのコメント。具体的な可能性を追い求めていきたい分野として8つのキーワードを話してくれた。「子育て、教育、介護、医療、流通支援、在庫管理支援、接客対応、建設」の8つ。

「基本的にはこの8つだが、他にもさまざまな分野での応用が可能であるはず」、「例えば建設現場ではヘルメットが必要だ。このヘルメットにスマートグラスを装備できたら、工事の手順指示、安全確認、現場実況、作業の記録、情報の共有など作業の効率化と安全対策のために役立つ。建設現場だけでなく、他にも消防士や警察官、展示会やイベントの会場設営（施工）、空港や港湾施設の作業員などヘルメットを着用して仕事をする人はたくさんいる」という。

さらに会場では AR 技術（Augmented Reality/拡張現実）によりグラスにさまざまな情報を映し出すデモをおこなっていた。例えば、美術館で



【写真 22】キーワードは8つ。「子育て、教育、介護、医療、流通支援、在庫管理支援、接客対応、建設」、以上の8つの分野での実証実験を目指す。

「SiME」をかけて展示してある絵を見ると、作者のプロフィールや解説がディスプレイの中に映し出される。3D 画像や動画を映し出すこともできる。クラウド環境を通じて詳細なデータや関連資料などを探し出して映し出すこともできるのだ。

CHIPSIP 社は端末（ハードウェア）を提供するが、アプリケーションの開発者向けに「SiME Smart Glass」の SDK (Software Development Kit) を 2014 年内目標にリリースする予定。この開発キットではゼスチャー入力 API や AR アプリを提供してアプリベンダーとの協業を目指す。端末は最終価格として 500 米ドル以下を目指す。

「ウェアラブルの可能性はまだまだ未知数。言葉だけのブームで終わってしまわないように、業務の現場で必要とされているアプリケーションに目を向け、端末の開発とアプリの開発を一步步やっていきたい」と話してくれた。CHIPSIP 社が提供する SDK に注目していきたい。

台湾の特色のある相声を探し求めて（前編）

戸張東夫（元産能大学教授）

わが国の落語、漫才によく似た中国の、笑いの伝統話芸^{シアンション} 相声をファンとして長年親しんできた。中国語のきれいな音を楽しめるうえ、話自体も面白い。ここ数年は台湾の相声にすっかりハマっている。十数年前台湾で買い求めた録音テープを改めて聴いたのがきっかけだった。中国と台湾は政治制度も、社会状況も異なるだけでなく、長い間交流が途絶えていた。だから中国相声とは一味ちがう、台湾色の強い「もうひとつの相声」を聴くことができるかもしれない。そんな期待もないわけではなかった。

録音テープのケースカバーに ^{ウエイロンハオ} 魏龍豪、^{ウウチャオナン} 呉兆南

の名が印刷してある。調べてみるとこの二人は台湾で一、二を争う名人クラスの相声芸人だという。魏は1999年七十一歳で他界したが、呉は八十八歳の高齢ながらいま（2014年）も舞台に立っているという。

写真を見る機会があったが、マユの濃い目鼻立ちのはっきりした、いかにも芸人らしいいいカオをしている。こんな人物なら舞台も見てみたいし、出来ればお会いして話をしてみたい。

台湾の友人にそんな話をしたところ半年も経たないうちに何から何まですべてお膳立てをしてくれた。こうして昨年（2013年）10月台中で呉さん



米ロサンゼルス自邸でくつろぐ呉兆南氏（2014年1月）



台中公演で観客の拍手に応える呉兆南氏（左）（2013年10月）

と弟子たちの公演をライブで楽しむことが出来たばかりか、今年（2014年）1月米ロサンゼルス
の自邸で呉さんにお会いし、相声が台湾にやってきた当時の様子など詳しく伺うことが出来た。大きな収穫であった。これらを踏まえ台湾の相声についていささか紹介してみたい。

まず中国相声を語ろう

台湾にはもともと相声はなかった。中国本土から伝えられたものだ。伝えられた相声は、台湾で中国とは異なる道を歩んできた。その結果台湾独自の、台湾の特色のある相声を作り上げたのかどうか。その辺を考察するのがこのエッセーの目的である。したがって直ちに台湾の相声に取り組みたいところである。ところが考えてみると中国相声そのものがわが国ではあまり知られていない。まず中国の相声をご理解いただいてから、台湾の話に移っても遅くはないであろう。多少道草を食うことになるがご容赦願いたい。

相声は清朝末期、第九代皇帝・咸豊帝在位の時期（1850～1861）到北京、天津一帯の中国東北部で発達し、広まった。いまから約百六十年前のことである。

わが国の笑いの話芸の歴史と比べてみると、落語は、江戸時代の趣味人の僧安楽庵策伝が笑い話集『醒睡笑』をまとめた元和9年（1623年）前後を起源とすればざっと四百年の歴史を誇る代表的な話芸である。また漫才は、それまで奉祝芸だった「万歳」をいまのような対話中心の「しゃべくり漫才」に改革した大阪・吉本興業のエンタツ・アチャコ（横山エンタツ、花菱アチャコ）がコンビを組んだ昭和6年（1931年）をいちおう出発点と考えると、約八十年の歳月を歩んできたことになる。相声は落語と漫才の間の時期に登場したものだ。

相声はこれだけの歳月を経た話芸なので、中国共産党が中華人民共和国を発足させた1949年にはすでに話芸として基本的に完成していたと考えてよいであろう。このように共和国成立前に作られたり、語られたりした相声は全て伝統相声、つ

まり古典相声、共和国成立後作られたものを新作相声として区別するようになった。

伝統相声は専制王朝の時代に生まれた話芸だから、時代の影響から逃れられず、封建的な考え方に染まっている。権力者や金持ちをわけもなく尊んだり、女性や労働者、農民を蔑視したり、また貧乏人や身障者をあざ笑ったりする作品が少なかつた。このため中国当局は一部の伝統相声を改作して上演を許したものの、伝統相声を敵視する傾向が強かった。芸人たちも伝統相声を避けるようになり、結果として伝統相声は公にはあまり語られなくなってしまった。残念なことである。一方新作相声は数多く作られたが、当局が厳しく管理、統制しているため本来の面白さを十分に発揮できないのが実情である。これもまたファンにとって残念なことである。

相声は漫才？それとも落語？

では相声はどのような話芸なのであろう。一口に相声といっても演じる芸人の数によって三つの形式に分類される。一人だと単口相声、二人であれば対口相声、また三人かそれ以上なら群口相声とよばれる。いずれも舞台に立ったままの姿勢で話を展開する。相声の内容はともかく、見た目ではわが国の類似の大衆演芸を挙げてみると単口は漫談、対口は二人が掛け合いで語るのだから漫才、群口は最近流行のコントということになろうか。

こうしてみると相声は漫談、漫才、コントを総合した話芸ということになるかもしれない。だが実際に聴いてみると芸人の数にかかわらずどれも落語の味わいなのである。試みにここで相声の特徴を以下に列挙してみよう。

まず第一にストーリー性が極めて強いことだ。笑いの話芸だからギャグやアドリブが飛び出すことは言うまでもない。だが、どんなときでも最初があって終わりがある、終始一貫した、起承転結のある物語をかたるのが原則である。

同一作品・台本を複数の異なる芸人が語ることが多い。とくに伝統相声にこれが目立つ。これが第二の特徴である。

また師匠から弟子へ、弟子からまたその弟子へというぐあいに芸や相声を伝承していく慣習が守られている。これが第三の特徴である。

四つ目の特徴は、長い歳月をかけて大勢の芸人が語り継ぎ、練り上げた話芸だけに、「マクラ」、「主題」、「オチ」など規範となる形や、守るべき慣習が出来あがっている。

最後は、相声を読んで楽しむのが一般的通念になっていることだ。有名な相声芸人であれば、自分の持ちネタをまとめ、自分の名前を頭につけた相声集を一冊か二冊は必ず出版しているといっているくらいである。

相声のこれらの特徴はすべて日本の落語に当てはまるものである。とくに古典落語には全て完全に当てはまる特徴である。漫才とはまったく別種の話芸というべきであろう。なぜわざわざ相声が漫才ではないことを強調するのか。これには理由がある。わが国で発行された各種の中国語字典や中日辞典を見ると、その多くが「相声」の訳語を「漫才」とか「中国漫才」としている。そればかりか中国の研究者の中にも「相声」を「漫才」と訳してはばからないものもある。いい機会なので改めて指摘しておきたいのである。

伝統相声小段「カネを拾う」

相声の短いものを小^{シアオトアン}段^{アン}という。本題に入る前のマクラや、アンコールにこたえて話す小ばなしなどに使う。この小段だけを一冊にまとめた『中国伝統相声小段匯集』が手許においてある。2002年に北京の文化藝術出版社が出版したものだ。ここからひとつ拾い出し以下に訳出してみよう。タイトルは「^{チエンチエン}撿^{チエン}錢^{チエン}（カネを拾う）」、対口相声である。説明は要るまい。説明しなければならないのなら相声とはいえない。

甲 性格というものはひとによって皆違う。好みもひとそれぞれだ。

乙 十人十色、それぞれ好みも違うな！

甲 だが度を過ぎるのは傍迷惑だ。

乙 違うない。

甲 講談が好きなもの、芝居が好きなもの、酒が好きなもの、どれもとかく度を過ぎしかねない。度のすぎたケチもいる。

乙 度のすぎたケチ？

甲 こういう手合いは四六時中金儲けのことしか考えない。外に出ると小銭でも落ちていないかなどといつも考えている。

乙 そんなのが本当にいるのかね！

甲 我が家の近くに二人の兄弟が住んでいる。この二人道を歩いているうちに雑談をはじめた。

乙 どんな？

甲 兄が弟にこんなことを言った。「きょう千元拾えたらいいんだがな。拾ったらお前に三百元遣る。おれは七百元で我慢する。」すると弟がこうだ。「兄貴はどんな権利があって七百元取るんだ！兄弟じゃないか折半でどうだ？おれにも五百元よこせよ。」

乙 そんなことで言い争いか？

甲 「お前もわからないヤツだな。おれが拾ったカネだ。三百元遣れば文句あるまい。そう欲張るものじゃあない」兄がこういうと、弟は「おれが一緒にいなくても拾ったカネは分けるべきだよ！」と譲らない。

乙 ついに喧嘩か！

甲 「そんなこと言うならお前にはビター文遣らない！」「何を言う。よこさなければ腕ずくだ！」「やる気か！」バシッ！一方が相手の横っ面をひっぱたくと、叩かれた方も負けずに相手の髪の毛につかみかかる。

乙 喧嘩するようなことかね？

甲 二人でなんと一時間も揉みあっていると巡査がやってきた。「手を離せ！どういことなんだ？」兄がこたえた。「私が一千元拾ったので弟に三百元遣るといったんです。しかし五百元くれといってどうしても聴かないんです。みて下さい！弟にかじられて耳たぶが半分千切れちゃいましたよ！」すると巡査が聞いた。「それでそのカネはどこだ？」「カネ？まだ拾ってなかつ

た！」

乙 確かに。度を越したケチだ！

これが相声である。紙幅の都合で一編だけしか紹介できないが、相声がどんなものか多少お分かりいただけたのではなかろうか。

そこで早速台湾の相声に話題を移したい。

この中国相声が予想もしなかった時期に、予想もしなかった形で台湾に渡り、さらにまた予想もしなかった人たちによって語り継がれ、そのことが台湾の相声のひとつの特徴ともなったのである。

相声が 1949 年台湾にやってきた

相声が台湾に渡ったのは 1949 年であった。

これは意外であった。もっと早い時期に台湾に伝わっていたと思っていたからだ。しかし中国の歴史を振り返ってみれば、最後の専制王朝である清朝が 1911 年の辛亥革命で崩壊、翌 1912 年孫文らによる中華民国が発足したとはいえ、1949 年に中華人民共和国がスタートするまで中国国内は混乱続きだったのである。また台湾はといえば、1895 年に日本に割譲されて以来 1945 年まで 50 年のあいだ日本の植民地だった。誰にしても相声どころではなかったのである。

それにしても 1949 年は中国にとってきわめて重大な歴史的時期であった。中国の支配権をめぐる中国共産党の人民解放軍と国民党軍による内戦は、人民解放軍の圧倒的優位のうちに最終局面を迎えていた。いち早く天津、北京を落とし、華北を制した人民解放軍は揚子江を渡り全面攻撃に移った。各地で孤立した国民党軍では全滅したり、戦わずして投降したり、共産党側に寝返ったりする部隊が続出、もはや壊滅状態だった。この年 10 月共産党は北京に中華人民共和国を樹立した。国民党のリーダー蒋介石もついに敗北を認め 12 月飛行機で台湾に脱出した。中華人民共和国と台湾の中華民国の二つの中国はこのとき以来存続している。

この時期を通じ戦火を逃れたり、国民党を支持

するひとたちが大勢台湾に逃れてきた。軍人、その家族、公務員、教員らおよそ 200 万人が難民として台湾にやってきたといわれる。このうち 60 万人は軍関係者だったという。この難民たちとその子弟を「外省人」と呼び、それ以前からの台湾住民「本省人」と区別したことはよく知られている。「外省人」にしても「本省人」にしても民族的には中国から来た漢人である。民族的な違いがあるわけではない。ただ「本省人」は当時中国語を理解せず、おもに台湾語を使っていた。また「本省人」は日本植民地時代を経ただけに日本語のわかるものが少なかった。

中国の相声芸人がこれらの難民とともにやって来て台湾に相声を広めたのであろうか。いやそうではない。相声芸人がやってきたという記録はまったくないのである。

筆者は以前台湾映画について研究したことがある。そのとき中国の多少名のある映画人で 1949 年前後に国民党軍とともに台湾に脱出してきたものが一人もいなかった事実を知った。国民党軍の文化政策が失敗したためだと言われていた。相声芸人についても同じことが言えるかも知れない。もっとも当時の相声芸人の貧乏暮らしから推測するに、たとえ望んだとしてもカネもコネもないため台湾に脱出しようがなかったというのが事実に近いのではなかろうか。

それでは誰が相声を台湾につたえたのか。

60 万といわれる国民党軍だった。もっと正確に言えば国民党軍所属の演芸隊であった。

「相声のような民間芸術は台湾では歴史はそれほど古くない。1949 年、1950 年以前にあったという資料も記録も私は見たことがない。今後の研究でもっとはっきりするかもしれない。1949 年から 50 年にかけて国軍（国民党軍）の大部隊が台湾にやってきたが、『相声』の公演がこのときから始まったことは間違いない。というのは当時師団級以上の部隊には、将兵慰問の演芸隊が作られており、多くても二、三人で演じる相声のような伝統的な大衆芸能は部隊内で引っ張りだこだった。京劇、現代劇、越劇（浙江省の地方劇）、豫劇（河

南省の地方劇) などもしばしば上演されていた。」
元相声芸人の張國棟はこう証言する。

軍が育てた台湾の相声

台湾ではこうして国民党軍の演芸隊が相声を語り継ぐことになったのである。演芸隊は台湾各地に展開する各部隊を訪れて慰問公演をするほか、軍内の演芸大会やコンクールに出演するなどもっぱら軍内で活動していた。

1950年朝鮮戦争が勃発、このため米軍部隊が国共内戦に介入して中国の台湾進攻を阻止したことから台湾もようやくかつての落ち着きを取り戻した。51年夏のことだが、わずか一か月前後の短い期間に「樂園書場」、「蓮園夜花園」、「紅樓」など台湾の主要書場(演芸場)が五つもオープンした。これは台湾の人たちが平和の到来を待ちかねて娯楽を求め始めていたことを間接的に物語るものといつてよかろう。演芸隊の隊員たちも台湾社会に活動の場を求めて軍を離れ、ラジオや舞台で芸人として生きていくものが少なくなかった。もちろん生活のためであった。

当時人気のあった相声芸人として魏龍豪、陳逸安、丁長華、胡覺海、張復生、謝君儀、馬元亮らの名前を挙げる事が出来るが、いずれも軍出身の芸人だった。台湾の相声芸人になぜ元軍人や軍関係者が多いのかと筆者はかねて疑問に思っていたが、これには台湾相声界の特殊事情があったのである。これも台湾の相声の特色のひとつといふべきかも知れない。

それはともかく相声芸人といっても軍の演芸隊出身だからアマチュアである。プロの芸人は一人もいなかったという。相声芸人として生きていくとなると現実は一筋縄ではなかったに違いない。中国にいた当時相声を見たことがある、聴いたことがあるという記憶を頼りに覚えているわずかな数の相声を繰り返し語ったり、細切れのセリフを寄せ集めて語ったりしながら自己流の相声で押し通すほか道はなかったのである。それでも何とかやっていたのは娯楽の少ない当時の観衆が喜んでくれたからであった。

昨年10月台湾で会った現地の相声芸人たちは、台湾の相声の現状を自嘲的に反省とも、批判とも受け取れる口調で批判し、欠点を数え上げた。中国と比べレベルが低い、正式に相声を学んだ芸人がひとりもない、相声に真剣に取り組むものがない、長続きしない、若い世代を育てることが出来ない、台本をまとめる人材がない、観客層を広げることができないなどである。だがこれは相声と軍の結びつきがもたらしたもので、いわば台湾の相声の宿命というほかない。

台湾の相声は「まいたタネ」ではなく、「こぼれ落ちたタネ」だった。台湾の片隅にこぼれ落ちたタネは日当たりも悪く条件の悪い場所で、世話をしてくれるものもなく、誰からも期待されることなく自分の力で何とかここまで生きながらえてきた。それだけでも並大抵のことではなかったに違いない。

相声と台湾語

中国東北地方の話芸である相声が中国南部福建省の対岸に位置する台湾に来たからにはことば(言語)の壁にぶつかることはいわば宿命である。相声とことばの問題にも触れておくべきであろう。

相声はもともと中国東北地方で発達したものだけに、はじめは東北地方の方言で語られた。現代に入って^{プウトンホア}普通話とよばれる標準語が制定されると、これを使うようになった。標準語といっても中国東北地方の方言を基にしたものである。中国各地には方言が多い。各地の方言による相声も奨励されている。だが相声はやはり普通話で語ることが圧倒的に多い。相声といえは普通話で語るのがいまや通念になっている。

ところが相声がやって来た当時の台湾では、人々(本省人)は台湾語と、日本の植民地時代に強制的に学ばされた日本語しか知らなかった。中国語はわからなかったのである。このため中国から新たにやってきた「外省人」とは意思の疎通もうまくいかなかったという。これでは相声の入りこむ余地はない。

「日本の植民地だった頃中国から台湾に京劇が伝えられた。中国語で演じる中国の伝統劇だったが台湾人ファンも少なくなかった。こういう人たちは相声を理解できたに違いない」という相声界の人もある。だが当時京劇を楽しむことが出来る台湾人はごく一部の裕福な人たちだけだったに違いない。当初相声を楽しんで笑うことが出来たのはやはり「外省人」に限られていたのではあるまいか。

このような状況を大きく変えたのは国民党政府が、台湾人に対する日本の影響を消し去る狙いもあって積極的に推進した中国語普及政策だった。

政府当局は1945年の日本敗戦によって中国に復帰した台湾を接収した直後、いち早く台湾省国語（中国語）推進委員会を設置、次いで1951年7月「各レベルの学校の教育は全て中国語で行う。台湾語の使用は禁止する。教員採用に当たっても中国語の能力を考慮すべし。」という行政命令を発した。この中国語普及政策で台湾の若い世代の中国語能力は急上昇した。「はじめのうちは相声

を聴いてもことばがわからないので興味がわかなかった。上流階級の人たちの楽しむものだった。でも学校で学んで中国語がわかるようになると内容も面白いので聴くようになった。」台湾政府機関で働く筆者の知人の本省人はこう証言する。

この中国語普及政策は、裏を返せば「台湾語を禁止する」ことだから、台湾の人たちの中には、中国語や相声のような中国語の話芸に反感を抱いているものがあるのではないかと筆者はかねて懸念を抱いていた。だが今回はそういう声を聴かなかった。運がよかったのかも知れない。相声に反感を抱くどころか、相声を聴いて中国語を学んだものも少なくないという。

こうしてこの中国語普及政策は相声が台湾社会に広く受け入れられるための大いなる追い風になったのである。この普及政策がなかったら相声はたぶん「外省人の相声」のままとっくの昔に忘れられてしまったに違いない。（後編へ続く）

（※写真はいずれも筆者提供）

台湾内政、日台関係をめぐる動向（2014 年 4 月上旬- 6 月下旬）

第四原発の運用凍結、民進党主席選挙

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

3 月の「ひまわり学生運動」の後、台湾政治の中心 이슈 になったのは、第四原発をめぐる攻防であった。同問題をめぐり、馬英九総統と蘇貞昌民進党主席の会談も行なわれたが、台湾当局は最終的に第四原発の運用凍結を決定し、その存廃は将来の住民投票に委ねる決定をした。民進党主席選挙が行われ、蔡英文前主席が圧勝した。統一地方選挙は、台北市長候補が与野党ともに決定したほか、新北市長は国民党のポスト馬の有力候補の一人である朱立倫市長が再選を目指す旨表明した。

6 月 24 日から、東京国立博物館で故宫博物院の至宝特別展が開催された。

1. 第四原発問題

学生運動が一段落した 4 月中旬以後、民進党は第四原発建設廃止を公約に掲げ、長期にわたり原発廃絶運動に従事する林義雄民進党元主席（現在は非党員）がハンストを行う中、行政院は同原発の運用凍結の決定を下した。

（1）民進党の第四原発建設廃止に向けた動き

4 月 16 日、民進党は中央常務委員会で党改革方案とともに、「二〇一四終結核四」（2014 年に第四原発の建設を中止に追い込む）行動方案を採択した。後者は、具体的な方案として、成立条件の厳しい現行の住民投票法とは別に「第四原発住民投票特別条例」を制定することを目指し、その条例案の設問も「建設継続」か「建設停止」を選択する容易な設問にして、有権者を惑わせない内容にすることで、住民投票で否決し建設廃止に追い込むことを訴えた。

現行の住民投票は、有効有権者過半数が投票した上に、有効投票数過半数の同意が必要だが、民進党は 2012 年に離島建設条例に基づいて実施された、賭博施設設置の賛否を問う住民投票で用いられた投票数に関わらず、単純多数決により可否

を決定する制度の採用を主張している。

民進党の動向に対して国民党は、「住民投票実施に反対はしないが、民進党が住民投票を急ぐ理由は、選挙対策である」と指摘したほか、現政権の閣僚経験者は、「蘇主席、蔡英文前主席はそれぞれ行政院長、副院長を務めていた時期に第四原発建設関連予算 448 億元の予算を認めるなど、当事は原発推進派であり今回の主張は矛盾している」と批判した。民進党側も「住民投票の選挙利用」との指摘を交わすために、住民投票は国政選挙とは別の時期に実施するとの見解を表明した。

蘇主席は住民投票特別条例の制定に向けて活発な動きを見せた。4 月の第四週には郝龍斌台北市長、朱立倫新北市長、江宜樺行政院長と個別に会談した。21 日の江院長との会談で、蘇主席は「行政院による建設停止命令」か「第四原発住民投票条例制定」の二者択一を迫ったが、江院長はいずれも拒否し、当地新聞は同会談における唯一の共通認識は「住民投票を行うだけ」であったと揶揄した。

その頃、林元主席は、22 日から反原発の立場を貫くため無期限のハンストに突入し、馬政権に対して改めて原発廃絶の立場を訴えた。同日、江院長、蘇主席、蔡前主席らは林元主席がハンストを

行っている台北市内の教会を訪問し、同氏の安否を気遣ったことが報じられた。

（２）政府の対応

反原発活動関係者が立法院周辺で抗議活動を行う中、4月24日総統府、行政院、国民党立法院党団は討議し、第四原発の凍結（中国語：封存）のコンセンサスに達したと報じた。翌25日、馬総統は蘇主席と総統府で90分にわたって第四原発建設の存廃、住民投票の成立条件などにつき意見交換を行った。同会談はテレビで生中継されたが、ほとんどの 이슈で双方の意見が激しく対立し、政治討論番組さながらの激しい応酬を繰り広げ、「視聴者」を楽しませたが、なんら合意に至らず物別れに終わった。週末の26日は、総統府周辺で反原発をテーマにした7千人規模のロードレース及び抗議活動が実施されたほか、27日には台北駅付近の道路を原発事故が発生したことを想定して、数千人規模の抗議参加者が道路に寝転がり周辺の交通を麻痺させた。

抗議活動が激しくなる中、同27日に国民党は馬総統、江院長らと15名の県市長との間で県市首長会議を開催し、①第四原発の1号機は工事を停止し、安全検査だけを行った後に凍結する。②第四原発の2号機の工事は全面停止にするとの二項目の合意に達した。同時に行政院は、迅速に全国エネルギー会議を開催し、将来の電力問題についての共通認識を探ると表明した。なお、健康状態が危惧された林元主席は、ハンスト1週間目に、体調を崩して台湾大学病院に入院したと報じられた。

翌28日江院長は記者会見を開催し、反原発派が求める即座の建設停止については、応じられないと述べるとともに、「凍結」、「工事停止」は建設停止ではなく、その運用の可否については、次世代に選択肢を残すものだ」と強調した。「建設停止」という言葉を避けたのは、台湾の株式市場へのダ

メージを和らげる苦肉の策であったとされた。

住民投票の実施時期について、江院長は明言を避けたが、2016年の次期総統選挙前は実施しないとの見方が大勢である。可能性として、第一原発の1号機の廃炉が予定され、現行の電力供給体制では予備電力が10%以下になり電力不足に直面する2018年、第二原発1号機の廃炉が予定され、電力制限危機に直面する2021年などが指摘されている。

2. 民進党主席選挙は蔡英文が圧勝

（１）蘇貞昌主席、謝長廷元主席の不出馬表明

政権奪回を目指す民進党にとって、誰が同党を率いて総統選挙を戦うかは、台湾だけでなくその動向に重大な関心を持つ中国政府の関心事でもある。2014年は、2016年の次期総統選挙の前哨戦とみなされる統一地方選挙が控えており、有力者の動きが激しくなっていた。今年の旧正月明けに、謝長廷元主席が次期主席選挙への出馬表明をしたのに続き、3月中旬には蔡前主席の出馬表明があり、5月の選挙では蘇主席も含めた3人の争いが見られてきた。

しかし、学生運動の余韻が残る党主席選挙の登記受付開始日の4月14日、蘇主席は自身のFacebookで主席選挙不出馬の表明を書きこんだ。民進党中央も後追いする形で、「第四原発建設停止を追求し、11月の選挙まで数ヶ月という状況の中で、我が党の力を分散、混乱させることは避けねばならず、すでに2人の主席経験者が次期主席選挙への出馬を表明する中で、党内選挙という争いを失くすことが党に対するダメージを和らげることになる」と考え、不出馬を決定した」と説明した。

同日午前中には、あたかも申し合わせたかのように、謝元院長も蘇主席の決定を評価し、自身も主席選挙への出馬を取り止める表明を行った。現、元主席の不出馬表明により、この時点で蔡前

主席の復帰就任が確定的となった。

蘇謝両氏の相次ぐ不出馬表明は両名の長年にわたる緊張関係を考えると、事前に十分な意思疎通を行った形跡があった。蘇主席が不出馬を決定した背景については、党改革、兩岸関係に関する新論述が進展しなかったこと、「ひまわり学生運動」において、民進党が積極的な役割を果たせなかったことがあり、選挙での同人の劣勢が予測されたことが指摘された。

（2）蔡前主席が圧勝、3度目の主席就任

2人の元主席が出馬を辞退したことで、蔡女史の当選が確実視されたが、最終的に元高雄県副県長の郭泰麟氏が立候補手続きを済ませたことで、二人の争いとなった。5月25日に投開票が行われた選挙は、蔡前主席が得票数85410票、得票率93.7%を獲得して圧勝し、第15代主席に当選した。郭元副県長は得票数5734票、得票率6.3%にとどまった。

開票後に記者会見を行った同党報道官は、「65.13%という高い投票率は、支持者の我が党の発展に対する強い情熱を示すものになった」と指摘し、「蘇主席からは、新主席の就任後、全党は一致団結し、年末の地方統一選挙の挑戦に向けて、台湾及び台湾人民の期待と奮闘に答えねばならない」との談話が発表された。表1は2008年以降の同党主席選挙の結果である。蔡女史は3度目の勝利となったが、過去二回の選挙とも競争相手は泡沫候補であったが、今回の選挙での圧勝は際立つものとなった。

当地新聞は、蔡新主席は「中国との交流も含めた兩岸政策」、「世代交代を含めた党改革の推進」、「統一地方選挙」、「学生運動を支持する社会団体との競合関係」を喫緊の課題として挙げた。

5月28日の主席就任式で、蔡新主席は「年末の統一地方選挙の勝利」、「民意に沿った政策」、「政権獲得に備えた人材育成」の三大任務を掲げた。また同日発表された党幹部人事で、注目された秘書長には、陳水扁政権で大陸委員会主任委員、駐米代表など要職を務め、蘇主席の下でも政策会執行長を務めた呉釗燮氏が就任したほか、政策会執行長には新潮流派の段宜康立法委員、文宣部主任にも蘇派とみなされる鄭運鵬氏が組織部主任から横滑りした。また中国事務部には謝長廷派とみなされる趙天麟立法委員を起用するなど、党内人事は団結を掲げるよう超党派人事を演出した。また青年部には27歳の傅偉哲氏が就任するなど世代交替をも感じさせるものとなった。

3. 県市長選挙関連

（1）台北市長関連

国民党の動向

同市は国民党と新党が争った1994年の藍軍陣営の分裂により、陳水扁が勝利した以外は、いずれも国民党候補が圧勝してきた。その中で、今回の選挙は稀に見る激烈な予備選が展開された。当初、連勝文党中央委員、丁守中立法委員、蔡正元立法委員、鍾小平台北市議の4人が登記したが、予備選3日前の4月17日に連戦元副総統に近いとされる蔡委員が予備選からの撤退を表明し、連

表1 2008年以降の民主進歩党主席当選者の得票率

年	主席当選者と得票率	他の候補
2008	蔡英文 57.06%	辜寬敏、蔡同榮
2010	蔡英文 90.29%	尤清
2012	蘇貞昌 50.46%	蘇煥智、吳榮義、蔡同榮、許信良
2014	蔡英文 93.71%	郭泰麟

資料元：「近年當選民進黨主席得票率」『聯合報』（2014年5月26日）頁4

表2 国民党台北市長予備選結果

候補	党員票支持率 (得票率×0.3)	世論調査支持率 (世論調査×0.7)	総支持率
連勝文	10647	27.801%	48.190%
丁守中	4765	25.894%	35.018%

資料元：「国民党台北市長初選結果」『聯合報』（2014年4月20日）頁1。

氏支持に廻るなど激しい駆け引きがあった。

19日に党員投票（30%）と世論調査（70%）を合計して争われた党内予備選は、党員投票で大差をつけた連中央委員が圧勝する結果となった。選挙戦では連丁双方の陣営間で誹謗中傷合戦も行われたが、敗れた丁委員は開票後すぐに、連勝文支持を表明したほか、馬主席も勝利に向けた一致団結を呼びかけ、修復を急ぐ姿勢を強調した。

緑軍の動向

有権者の構図が藍軍に有利な台北市だが、今選挙では国民党の連勝文と世論調査でトップ争いを展開している柯文哲台湾大学病院医師は、脱政党を掲げ、反国民党勢力の結集としての参戦を目指したことから、民進党の予備選には参加しなかった。民進党も政党間競争よりも国民党を勝たせないことを優先に考え、先に民進党で候補を選出し、次にその勝者と柯氏を競わせる二段階の選出方法を採用した。

民進党の予備選には呂秀蓮元副総統、許添財前台南市長、姚文智立法委員、顧立雄弁護士の4名が登記したが、選挙直前になって呂元副総統が選挙戦からの撤退を表明し、最終的には3人の争いとなった。5月14日に世論調査のみで行われた予備選は事前の予想を覆し、姚委員が勝利した。民進党秘書長は、世論調査は調査会社3社により、民進党候補と連勝文との対比式で行い、全ての会社の調査で姚委員がトップを獲得したと説明した。

この後、党内予備選を勝ち抜いた姚委員と柯氏との間で緑軍の統一候補を決定する第二次予備選が行われた。第二次予備選は、6月2日から候補

2人で3回にわたり政見討論会を実施した後、同12日に世論調査により、実施された。ここでも、事前の予想通り柯氏が勝利し、民進党は党内手続きを経て、緑軍の統一候補として柯氏の選出を決定した。一方、その選出過程で不満を持っていた元民進党籍立法委員の沈富雄氏が、無所属で台北市長選挙への出馬宣言を行った。6月14日に公表された『聯合報』の世論調査では、柯氏、連氏がともに34%で並び、沈元委員も9%の支持を獲得したと報じた。

（2）新北市長関連

国民党の動向

台湾で最大の人口を有する新北市の市長選挙の、各種世論調査では、朱立倫市長が独走しており、再選は堅いと見られてきたが、2016年の総統選挙への出馬の可能性も取り沙汰されてきた。しかし、6月中旬には、馬総統との会談を通じて、低迷する国民党を支えるという大局を重んじ、先に新北市長の再選を優先させ、現職市長の身分で2016年の総統選挙への出馬を模索する予定だと報道された。

その後、6月24日に朱市長は自身のフェイスブックで新北市長の再選を目指すと、事実上の出馬表明を行った。ポスト馬総統の最有力候補の一人である同人の出馬表明は、11月の統一地方選挙における国民党の士気を大いに高めるだろうと報じた。同日夜に『聯合報』が行った支持率調査では、朱市長が55%の支持を獲得し、游錫堃元行政院長の22%に大差をつけるなど、現段階では、国民党にとって、最も当選が有力な直轄市となって

いる。

緑軍の動向

民進党は昨年12月の党内予備選で游元行政院長が勝利し、党内候補に内定したが、友党である台湾団結聯盟の林志嘉秘書長も出馬を模索していたことから、游林両氏の間で統一候補選びが行われた。6月26日に実施した世論調査の結果、游元院長が勝利した。台聯側は、民進党に対し選挙での協力を約束したことで緑軍陣営は新北市でも協力態勢が整った。

5. 国民党関係者の汚職容疑

(1) 桃園県副県長の収賄容疑

5月30日、検察当局は葉世文桃園副県長ら関係者を集合住宅建設の収賄嫌疑で自宅と事務所などを捜査した結果、多額の現金が見つかり、身柄を拘束した。右展開を受け、呉志揚県長は即日同副知事を解任した。また国民党は後日、同副県長を党籍剥奪（取り消し）処分にした。

再選を目指す呉県長にとって、側近のスキャンダルは選挙へのダメージは必至となっているところ、6月9日には苦戦必至を見越した党内関係者から、桃園市、台中市の同党公認候補を早い段階で交代する可能性があるとの発言が報じられ、本人たちが慌てて否定する一幕もあった。

(2) 基隆市長候補の汚職疑惑

6月17日、黄景泰基隆市議会議長（国民党同市長公認候補）が、同市の建設事業に関する口利き問題で検察の事情聴取を受け、即日検察に身柄を拘束された（後に仮釈放）。右事件を受け、国民党は同議長の公認を取り消し、新たな候補選びの可能性が報じられた。

その後、一部の世論調査で黄議長は支持率が急落し民進党候補に大差をつけられた状況をふまえ、7月9日に国民党は中央常務委員会で黄景泰氏を基隆市長公認候補と認めた決議を取り消す決

議を採択した。一方で黄議長は自らの潔白を訴えるとともに、出馬の意向を崩しておらず、藍軍は分裂選挙の可能性が高まった。

6. 内政その他

(1) 国民党の副主席人事

馬總統の国民党主席の任期は2016年5月20日の總統退任の日まで保障されているが、後継者レースとの関連で副主席人事は注目を集めている。4月29日に国民党は中央常務委員会で、3名の副主席であった林豊正、詹春柏、蔣孝嚴の辞任と、新たに朱新都市長、胡台中市長、郝台北市長の副主席就任に関する事案を採択した。その後、6月3日にも同じく中央常務委員会で、党務工作の必要として呉敦義副總統を同党副主席に任命する事案を採択した。今人事により、副主席7名の序列で呉副總統がトップに躍り出たことで、ポスト馬をめぐる微妙な影響を与えるとの指摘がされた。

直轄市長3名、副總統の副主席就任は、党内改革の一環としての世代交代の促進、統一地方選挙に向けた挙党体制の確立、ポスト馬英九を狙う人物の平等条件下の競合などが狙いとみなすことができる。

(2) 馬總統就任6周年演説関連

馬總統は、5月20日の就任6周年の記者会見を台中市の中国医薬大学で行った。今記者会見は、3-4月にかけての学生運動後、初めて大学のキャンパスに入っただけの公式活動であったことから、「青年の声に耳を傾け、世代間の正義を実現する」と題し、青年の教育、雇用、政策への参与等青年問題重視を打ち出す内容となった。記者会見後には青年代表との対話も行われた。

(3) 台北地下鉄板南線で殺人事件が発生

日本人観光客も頻繁に利用する台北、新北市を

走る地下鉄の板南線車内で5月21日夕刻刃物を持った大学生の男が無差別に乗客に切りつけ4人が死亡、21人が負傷する大惨事が発生した。容疑者はその場で逮捕された。同人は自身のフェイスブックで「大きいことをしたい」、「人を切る（砍人）」などの書き込みをしており、犯行を示唆していたと報じられた。

事件後の数日間、ネットで模倣犯罪を示唆するような書き込みが数例あり、逮捕される事案も発生した。また事件から数週間は、地下鉄の駅、ホーム等で警戒にあたる警官の姿が頻繁に見られたが、次第に平静を取り戻した。

7. オバマ大統領の尖閣諸島にかかる発言に対する台湾外交部の反応

当地各紙は4月23-25日にかけて国賓として訪日したオバマ大統領が、安倍総理との非公式会談で「尖閣諸島は日米安保条約の適用範囲である」との発言を寿司屋で会食する日米首脳の写真とともに大きく報じた。

台湾当局の反応は、林永樂外交部長が、「釣魚台（尖閣諸島）の主権は中華民国に属することは疑いの余地がなく、我が方は『尖閣諸島』の呼称は受け入れられない。また特定のルートを通じて、今回の首脳会談についての内容について照会した」と述べるとともに、「米国は一貫して釣魚台の主権争議については特定の立場をとっていない」、「当該関係者は国際交渉メカニズムを通じて同問題を処理すべきである」との指摘がなされた。

8. 閣僚、議員の靖国参拝に対する批判

台湾外交部は靖国神社の春季例大祭に合わせて、日本政府の複数の閣僚が参拝したことに対し、深い遺憾の意を表明するとともに、東シナ海情勢が緊張する際に、閣僚が参拝したことは双方の対立を減じることに無益であり、理性的な態度で争議を解決することを望むと指摘した。また数日後

に、国会議員146名が参拝したことにつき、「わが政府は、日本に対して一貫して近隣諸国の感情を傷つける行為をしないよう呼びかけてきた」として再び深い遺憾の意を表明した。

9. 馬總統の尖閣諸島シンポジウム出席

馬總統は、下関条約締結119周年の4月17日に中央研究院で開催された尖閣諸島問題に関する学術シンポジウムで講演を行い、台湾の同主権問題に対する台湾側の従来の立場を歴史面に焦点を当て主張したほか、東シナ海における緊張を緩和するためにも対話、平和的方法を通じて争いを解決するよう呼びかけた。同会議には筆者も発表論文のコメンテーターとして参加したが、場外には、馬總統に抗議する学生数十名がひまわりを掲げ反対のスローガンを叫んだ他、会議場でも「台湾未来、人民作主」（台湾の将来は、人民が主体で決定する）、「兩岸協議、立法監督」（兩岸の協定は、議会が監督する）とのスローガンが書かれた手製のプラカードを頭上に掲げ、馬總統の兩岸政策に対し無言の抗議を行う研究者もいたが、大きな混乱は起こらなかった。

10. 東京国立博物館における故宮博物院の至宝特別展の開催

6月24日から9月15日まで東京国立博物館（以下、東博）で開催されている「台北 國立故宮博物院-神品至宝-」は、6月に入ると台湾各紙で日本側の関心の高さが紹介されるなど歓迎ムード一色だったが、正式開催まで1週間を切った6月21日の『聯合報』など台湾各紙は、主催者側が使用する一部の宣伝ポスターや看板に、故宮と東博側で契約した正式名称である「台北 國立故宮博物院」ではなく「國立」が抜けた「台北 故宮博物院」と記されていたことに対し、問題が持ち上がった。台湾当局は、行政院を通じて東博に対して、20日に予定されていた国宝「翠玉白菜」の開箱儀式を

急遽取りやめさせたほか、6月21日午後まで、東博が文言を全面的に修正し、正式名称を使わない限り、特別展をキャンセルし、周美青総統夫人の訪日も取り消すと最後通牒を突きつけたと報じた。

問題となったポスターなどから、「國立」の文字が抜けたことについて、東博側は「表現方法はメディアの自由であり、我々に拘束力はない」との苦しい説明に追われたが、現地メディアは「日本側の小賢しい行為は、台湾の心を傷つけた」と報じた。その後、日台双方の関係者で協議が続けられたが、台湾側は東博側が作成した宣伝用ポスター、チラシ、入場券には「國立」が記載されたものと無いものがあることが判明したため、引き続き日本側に是正を求め、日本側の修正期限の猶予を2日間引き延ばす措置をとる一方で21日には、総統夫人の訪日の中止を正式に決定した。翌22日、予定されていたイベントも一部中止に追い込まれたが、日本側が引き続き入場券、ちらしなどの名称修正作業を行ったことから、総統府関係者は「日本側が誠意を見せれば、明日の開幕は可

能であろう」との見通しを語った。

台湾当局の強い姿勢に対して、多元社会の台湾では疑義を呈する声も見られた。許世楷元駐日代表は、「主権問題で原則を堅持するのも大切だが、日本側が是正努力をしていることに鑑み、長期的な観点から日台関係の重要性を認識し、批判や要求は適当なところで落としどころを見つけ、特別展がスムーズに開催されるようすべきである」との指摘や、本土派団体からは、「主権問題に関し、日本に対しては強硬な姿勢を示すが、兩岸交流の際には、中国に対して軟弱な姿勢しか見せない、馬総統の姿勢はダブルスタンダードである」との批判を展開した。

その後、23日早朝4時の段階で、全ての「國立」の字が欠けたポスター、看板などの撤去、修正が完成し、台湾側も同日7時には全て確認できたことで、同特別展は23日には予定通り、メディアや貴賓を対象としたプレオープンとなった。6月24日の正式開幕から7月7日までの開幕2週間の時点で15万人を動員したと報じられた。

岡山市・新竹市友好交流協定締結10周年記念

「台湾新竹演劇公演」

◆はじめに

平成 26 年 4 月 29 日、台湾・新竹市演藝廳「國際會議廳」は大きな拍手と歓声で揺れていました。市民参加型の演劇を海外で、台湾・新竹市で上演するという、私達の一見とんでもない企みが遂に結実したのです。

その日、会場である國際會議廳では、岡山からやってきた日本人と台湾新竹市の高校生や大学生が一つになり、笑いや涙、感動を「共有」する、そんな空気に満ちていました。それは国境や言葉の壁を超えた、本当に奇跡のような一日でした。

誰もが最初は市民参加の舞台が海を超えて台湾新竹市の地で上演できるとは思っていませんでした。しかし「友好交流協定締結記念」を機に「岡山の市民レベルでの文化交流」を創造したい。そして「東日本大震災の折に、台湾から多額の支援をいただいたことへの感謝」の気持ちを伝えたいという想いが、様々な人の心を動かし、この公演へと導くことができたのです。

◆市民参加型演劇「演劇 on 岡山」から「新竹演劇公演実行委員会」「演劇 move ON」へ。

この奇跡のような日と準備に費やした素晴らしい 1 年間を説明する前に、まず母体となった「演劇 on 岡山」についての説明をしなくてはならないでしょう。

「演劇 on 岡山」とは、岡山市にあるルネスホールの特別企画事業として平成 23 年に開始されました。岡山市に在勤在学及び岡山市民を対象に出演者を募り、プロの演出家を岡山に招聘（3 ヶ月間岡山に滞在）し、3 ヶ月間で稽古から公演まで

を行う市民参加型の文化創造事業です。

脚本は岡山所縁の物語を題材にした作品を一般公募し、平成 26 年 3 月までに 4 つの作品が生みだされてきました。（演劇 on 岡山Ⅳは一般脚本該当なし）

※現在は演劇 on 岡山Ⅴ（平成 27 年 1 月から 3 月開催予定）に向け企画進行されています。

この市民参加型演劇の第三弾「演劇 on 岡山Ⅲ」の公演演目が、今企画の根本になり台湾・新竹市で上演された『月の鏡にうつる聲』です。

「演劇 on 岡山Ⅲ」は、過去最高の参加者と観客動員数をほこり、観劇者からも感動の声をいただきました。

さて、「演劇 on 岡山」当初の企画段階に於いて、海外公演を目標に考えていましたが、出演者の中には初めて舞台を経験する者も多く、実現は難しいと考えられていました。出演者達も、海外公演の話は想像の範疇を越えるもので、「プロの劇団でもない自分達が海外公演なんてとんでもない！」と思っていました。

しかし平成 25 年 3 月、大きな歓声とともに幕を下ろした「演劇 on 岡山Ⅲ『月の鏡にうつる聲』」の興奮は、すぐに冷めるものではありませんでした。終演から 2 週間が過ぎた頃、「演劇 on 岡山」の当初の目標である海外公演の話が再燃したのです。そして私達の間に、大震災の時のニュースが過ぎりました。・・・やるなら、台湾で。

この時、出演者も企画者も、その公演に関わった者すべてが、台湾でこの演目をやりたいという気持ちを燃らせていました。

さて、面白いのはここからです。それぞれが社会生活に戻った時、そんな気持ちは日々の生活に

埋もれ、忘れていくものかもしれません。しかし、この時の私達は少しだけ違っていました。台湾に『月の鏡にうつる聲』を持っていきたい、上演したいという想いをぶつける先をそれぞれで探し始めたのです。実際に形になるかどうかは別として・・・。

そのうち興味深いことが起こりました。それぞれが探していた海外公演の道程が、岡山市の関係者にお会いした時、「ひとつ」に紡がった（つながった）のです。

それは「演劇 on 岡山Ⅲ」公演パンフレットとチラシを手に、期待と不安を募らせながらもお話を待ち掛けた時でした。その方がふと「そう言えば今日、君たちと同じように台湾に行きたいから協力して欲しいと言ってきた方がいたのだけれど」と、鞆から取り出した一枚の紙。それが「演劇 on 岡山Ⅲ『月の鏡にうつる聲』」のチラシ（写真1）だったのです。私達は驚き、「正にその話です！！」と思わず叫んでいました。

なんと私達がお会いする数時間前に私達とは別で方法を探っていた「演劇 on 岡山」プロデューサーが、どうにか台湾でこの舞台を上演したい、

文化交流として公演ができないだろうかと話を持ちかけたばかりだったのです。これには相手の方も驚きを隠せぬようでした。偶然か必然か、自分に向けて二方向から矢が放たれたのですから。

そして想いの込められた二本の矢は、その方の胸を射抜いたわけです。この一件で、私達とその方の距離が一気に近づきました。

「台湾に対する想い、東日本大震災の義援金への感謝や友好交流10年目として演劇公演をしたい。しかもこの岡場で生まれた、市民参加型のオリジナル劇を持って新たな文化交流の発端を探りたいという気持ちはよくわかりました。私も方法を前向きに考えてみましょう」との言葉は、私達の光明となりました。

その後、私達は二つの矢をひとつに集約し、即座にスタッフを整えて「研究会」を立ち上げました。研究会は岡山市との交渉や台湾公演への時期設定や交渉を含め本格的に実現に向けた「実行委員会」と、その内部に属し実務運営を担う「演劇 move ON」と形をより現実的なものへと変えて行きました。手探りながらも、台湾公演を実現したいとの考えのもと必死でした。

そのうち私達は台湾に対する想い、この演目に対する想い、その想いから生まれたこの話が、現実に向けて動き出している実感を持つと同時に、責任感と強いプレッシャー、そして本当に台湾の方々に私達の想いが伝わるのだろうかという不安や緊張感に変化していきました。

私達の想い、「ありがとう」が伝わるのか・・・と。

◆ゼロからイチを作ること （準備期間の1年前から出発まで）

物事が動く時の速さは、経験や自分の気持ちなど知らぬ顔で、進めているはずの自分達でも追いつけないほどの勢いを見せることがあります。事実、矢を放ったあの日から1ヶ月後には、岡山市



写真1（演劇 on 岡山 公演チラシ）

のバックアップが見え、運営が始まるまでもわずか2ヶ月程でした。そしてこの時点で先に述べた研究会から発展した実行委員会発足や運営事務局の設置も済んでいました。

岡山市と新竹市との情報交換に関しても両市の国際課に担当者をつけていただきました。また、岡山県下の「山陽学園」と、姉妹校である「台湾新竹市中華大学」の協力も決まり、公演までの大まかなスケジュールの決定を行いました。

ここで、全体的な流れを記述しておきます。

●平成 25 年

4 月～6 月

「岡山市・新竹市友好交流協定締結 10 周年記念『新竹演劇公演』実行委員会」発足。同時に運営事務局「演劇 move ON」設置。

「演劇 on 岡山Ⅲ『月の鏡にうつる聲』」の演出家であった関美能留氏に演出を依頼。

7 月 新竹市・岡山市間で情報交換が始まる。同時に新竹市の中華大学との情報交換を行う。

8 月 「演劇 on 岡山Ⅲ」出演者の中から参加者を募集（再演のため）。

10 月 新竹市下見及び打ち合わせのため、演出家とプロデューサー渡航。公演日を決定。

11 月 出演者 13 名決定。

12 月 参加者への説明会開催。（写真 2）
この時点で公式に情報を公開。『月の鏡～』チラシデザイナーに再デザインを依頼。

●平成 26 年

1 月 出演者及びスタッフを含む、全ての参加者による決起会を開催。（写真 3）



※写真 2（説明会）



※写真 3（決起会）

協賛企業募集を呼びかける。

2 月 公演チラシ完成。

3 月 稽古開始（写真 4）。公演予告動画を YouTube にて公開。

4 月 岡山公演本番（20 日ルネスホール）
新竹公演本番（29 日新竹市演藝廳）

この期間の中で広報（チラシ・パンフレット・予告動画制作）や公演をどのように執り行うかなど、決めなければならない事が山積みでした。

更に、実行委員会・運営事務局もまた市民であり、それぞれが生業を持った上で今回の企画に携わっているため、運営に割ける時間はわずかでした。



※写真4（岡山稽古）

た。そこで、今回の参加者全員で分担して運営を行う方式を執りました。その根底には私達は公演で利益を追求しているわけではない、ましてや今回は自らの意志で台湾新竹市に演劇を通していっぱい「友好ありがとう」「支援をありがとう」「観に来てくれてありがとう」それらの様々な「ありがとう」を届けに行くのだ。だからこその考えでした。

当然潤沢な予算があるわけではなく、日に日に周囲の協力の「聲」は大きくなってきているものの、資金集め等やったことのない市民には楽なものではありませんでした。

それでも、公演直前まで資金を集め、本当に多くの協賛金や寄付金、そして助成金、参加者の自己負担金によりなんとか資金繰りの目処がたちました。出演者やスタッフを始め、新竹市や岡山市の関係者の方々も一丸となって、私達を影日向に支えて下さったからこそ、活動から約1年という短期間でどこにも類を見ないだろう市民参加型演劇の海外公演実現まで漕ぎ着けたのです。

そして皆それぞれに仕事を持ちながら、運営と稽古をこなす日々はあっという間に過ぎていき遂に岡山公演本番の日を迎えました。

◆岡山壮行公演の意味と、見えたもの。

ここで今回台湾新竹市での演目『月の鏡にうつる聲』についての説明をしておかなくてはならないと思います。

この演目は日本人なら誰もが知っている「桃太郎」の30年後を描いた作品です。

『鬼退治の後、桃太郎は吉備の里を治める要職につきます。しかし、桃太郎は酒に溺れダメな中年桃太郎になっていました。更に、鬼退治の日から20年間、吉備の里では雨が降り止まず、鬼の唸り声が鳴り響いています。

降り止まない雨のせいで村人の生活は困窮し、遂に村人達は暴動を起こします。その混乱の中、桃太郎は初めて鬼退治の真相を明かすのです。そこには鬼となった温羅（うら）と桃太郎の友情、都の策略が潜んでいました。

様々な人物の想いが交錯した鬼退治の真相、そして止まない雨の理由が明かされ、再び桃太郎が立ち上がる』

という桃太郎の鬼退治に隠された真実が語られる物語です。驚いたことに、台湾では昔話としての「桃太郎」が有名で馴染みのある話なのだそうです。

そしてこの演目は4月29日の台湾公演に先駆け4月20日に岡山壮行公演が企画されていました。一日限りの再演です。

この様な市民参加型の企画で再演することはかなり異例ですが、この岡山公演はそれ以上に大きな意味がありました。

「言葉に想いを乗せて届ける」ということを、まず岡山でできなければ、台湾公演は成り立たないと考えられたからです。

今回は台湾でも日本語で上演をするため、「言葉の壁」を越えることが関門でした。字幕や同時通訳等の案も出されましたが、「何も飾ることなく、自分自身がきちんと想いを言葉に乗せ、届け

ようとすれば言葉は分からずとも想いは届けられる」という演出家の判断で日本語での上演を決めました。

私達は想いを言葉に乗せる、届けるということを意識して稽古に励みました。しかしその前に、日本語が通じる岡山で言葉が届かなければ、とても台湾では通用しない。それを推し量る重要な公演だったのです。

岡山公演の前日まで稽古を重ね、徐々に出演者の中で、期待と不安、緊張感が高まっていくのを感じました。

果たして想いは伝わるのか？ここで伝わらなければ台湾ではどうなるのか？不安を上げれば限(きり)がありません。しかし、開演して間もなく、その不安は高揚へと変わります。

4月20日14時、岡山公演開演。

いざ舞台に立ち、客席に目を向けると、市民演劇の再演にも関わらず、多くの人で会場が埋まっていました。そして話が進むにつれて場内の雰囲気が少しずつ変わっていくのを感じました。

物語の中盤、村人達が桃太郎に石をぶつける場面では、観客が村人として参加できる演出になっており、大いに盛り上がりました。終盤に入り、桃太郎と温羅の互いを想う気持ちが語られる場面では、すすり泣く声が聞こえてきました。そして

迎えたクライマックス。この時、出演者やスタッフ、そして観客の全てがその瞬間を共に感じ、涙や感動を「共有」していました。(写真5)

私達にとって、この岡山公演の反響は自信となり、台湾公演への大きな励みになりました。そしてその一週間後、私達は台湾の地に降りたっていました。

◆そして台湾・新竹市演劇公演へ 終わりと始まり

岡山公演を終えた私達は、一週間後の4月26日午後、岡山空港に集合していました。ここからは4月26日(出国)～4月30日(帰国)するまでを、日ごとに追って行きたいと思います。

●4月26日、出国。

4月26日午後2時。出演者13名+スタッフ5名+応援団3名(出演者家族)、14歳から62歳の総勢21名が岡山空港に集合しました。

集まった皆の荷物は、一様にかんりの大荷物でした。それぞれの衣装に加え、パンフレットや小道具などを詰め込んだ重たいスーツケース。しかし、確かに重いはずの皆のスーツケースは、台湾への期待がたくさん詰まったものに見えました。

そんな期待と胸の高鳴りを乗せた飛行機は、午



※写真5 (岡山公演)

後3時40分、岡山空港を離れました。

約3時間の搭乗時間を経て、台湾・桃園国際空港に到着したのは現地時間の午後5時半。空港から新竹市内のホテルまではバスで約一時間かかります。ガイドの話を聞きながら車窓から見た異国の町並みに、感慨深さを感じました。

ホテルに到着すると、現地の方に屋台街を教えてください、チェックインを終えてすぐ街に繰り出しました。屋台街に向かう道すがら飛び込んでくる町並みは、異国に来ているけれど、なんだか懐かしさを感じるもので特に新竹市役所や処々に残る昔の町並みは勢いと強さを感じ尚且つ郷愁さえ憶えるものでした。

そして辿り着いた屋台街の人々の活気は今の台湾を体現しているようでした。屋台街で夕食をとった私達は、しばらく散策し、翌日から稽古のためホテルへ。

●4月27日、仕込み・そして初稽古。

この日は午前中にスタッフが会場に入っの仕込みです。今回、帯同したスタッフは照明、音響、舞台美術の3名という少数精鋭で挑みました。演出家とプロデューサーは事前に会場を下見していましたが（前年10月）、スタッフにとってはこの日が初見でした。初めて踏み込む会場で、瞬発的にイメージを創り動き出す。それぞれの感性と閃きで少しずつ舞台が形作られていきます。（写真6）

午後からはいよいよ出演者が合流し、台湾で初めての稽古が始まりました。岡山公演の時とは声の反響もステージの造りも全く違う空間での稽古は、新鮮さと少しの戸惑いを感じながらになりました。

岡山公演をなぞる形で通し稽古を進めながら、出演者自身が舞台上で自由に動いてみる。その立ち位置や動き、そして全体の流れを演出家が創り、それに合わせてスタッフが周りを固めていく。岡



※写真6（台湾仕込み）



※写真7（台湾稽古）

山公演にはなかったシーンが新たに加えられ、その場で舞台は創られていきました。（写真7）

舞台は生き物だ、とよく言われますが、空間によって全く様相を変えた『月の鏡にうつる聲』は正にそれでした。

演出家のタクトに合わせて、出演者とスタッフが舞台を彩っていく。『月の鏡のうつる聲』生まれ変わっていく様は、まるで進化を遂げる生き物のようでした。

この時、私達はただガムシャラに、良いもの創

りたい、「ありがとう」を台湾の人達に届けたいという気持ちで自分を突き動かしていました。それがいつも以上の集中力を生み、舞台を進化させることができたのです。

● 4月28日（月）

この日は「国際会議廳」が休館日の為、稽古は休み。しかし、朝から皆緊張。というのもこの日、この公演の件でお世話になっていた中華大学の先生の意向で、日本語学科一年生の授業に参加することになっていたのです。午前8時、緊張の面持ちでバスに乗り込み一路中華大学へ！

到着後、簡単な説明を受け、いざ教室へむかいます。授業内容は学生が日本語で質問し、それに答えるというものでした。私達一人一人に対し学生は5人、1対5での質問タイムが始まりました。（写真8）

まず驚いたのが、学生達の日本語の上手さと日本文化への知識でした。日本に対する好奇心と憧れにも似た興味が真っ直ぐ伝わってきました。この親睦会はむしろ私達の方が刺激を受け、その純粋さに感動すら感じました。

帰りのバスの中では参加者が皆口を揃えてここに来てよかった、あの学生たちにあえて本当に良かったと言葉にしていました。



※写真8（中華大学）

そしてその日の夜、岡山から強い味方が応援に駆けつけてくれました。岡山市の関係者や経済界の方々が合流し、新竹市文化局主催の歓迎レセプションを開いてくれたのです。（写真9）

この時、多くの新竹市関係者の方とお話をさせていただき、今回の文化交流に寄せる期待と希望、そして歓迎の意を表してくださいました。その気持ちに触れて、翌日に控えた台湾公演がどんなに大きな意味を持つのか、再度実感し、気が引き締まる思いでした。

● 4月29日、公演当日。

遂に公演日。ホテルのロビーに集合した参加者達は、昨日のことにテンションも上がっている一方、この気持ちを伝えたい想いに満ちた精悍な顔つきでした。

今日で最後・・・この数ヶ月間の準備の事を思い起こしながら、全員で「国際会議廳」へ向かう。でも、なんだか今日で終わるという実感が湧かないような、いつもと変わらぬ空気で、馬鹿な話をしながら歩いていました。

午前9時、会場入り。

さあ。いよいよ本番の一日が始まりました。

午前中は軽く体を動かした後、音響・照明の流れを見ながらの通し稽古。昼食をはさみ午後2時



※写真9（歓迎レセプション）

から2回目の通し稽古。

出演者達は、一昨日変更になったばかりの演出もきちんと頭に入れ、自分のタイミングを見つけて舞台に立っている。しっかりと形になっていました。

そして刻一刻とその時は近づいて来ています。思えば一年前、市民が文化交流なんて無理なんじゃないか、とか色々言われても、この日を信じて組み上げてきました。そこには事務局や一年前から動いていたスタッフはもちろん、出演者やその家族、両市の関係者、中華大学の先生や学生達。

本当にいままで多くの方の想いに支えられてきました。

応援してくれた人たちの想いも一緒に心に据えて、私達の気持ちを届けるために、この場所に・・・今、出せる全てを！

午後4時半、開場。

初回は新竹市の高校生が中心で観劇することになっていました。あっという間に客席が埋まっていきました。その中には岡山から来てくれた方々の顔も見えます。

午後5時、開演。

最初の出演者が舞台に上がると、拍手が沸きました。その後、新しい出演者が登場するたびに拍

手で迎えられます。慣れない反応に戸惑いも感じましたが、そのうちそれはとても新鮮で、温かく私達の背を押してくれている様にも感じられてきました。

中盤に差し掛かり、高校生達も岡山から来た方々も舞台の世界に入り込んでいるのが私達にも伝わってきました。しかもその眼差しには涙が見て取れました。

そして、クライマックス。その時、私達出演者もお客様も一つだったのです。まさにその場に共に存在し、皆が温羅であり桃太郎であり村人でした。

午後6時30分終演。惜しめない拍手に包まれて、初回公演を終えました。(写真10)

そしてわずか30分後・・・

午後7時、第二回公演開演。

二回目の主な観劇者は、先日授業に参加させていただいた中華大学の日本語学科4年生です。

舞台序盤から笑い声が場内に響きます。確実に日本語を理解してくれているが、しかし、だからこそ本気の言葉じゃないと伝わらない。出演者が皆、そう感じていたと思います。

中盤から終盤に向かい皆の顔つきも変わり、声



※写真10 (台湾公演)

さえも変わっていくのを感じました。その場にいた人達と一つの感情を共有出来た、とても貴重な時間だったと思います。

そしてこの日、会場である「國際會議廳」では、岡山からやってきた日本人と新竹市の高校生や大学生が一つになり、笑いや涙、感動を「共有」する、そんな空気に満ちていました。それはこの演目『月の鏡にうつる聲』を介して、国境や言葉の壁を越えた瞬間でした。

中華大学の学生達もまた、大粒の涙を流してきていました。その姿は、帰国した今も私達の胸に強く焼き付いています。

● 4月30日、帰国。

公演翌日早朝。昨晚の余韻に浸る間もなく、私達は空港に向かいました。台湾に滞在した5日間は、本当にあっという間でした。しかし、たくさんの人と出会い、たくさんの想いに触れることができた、充実した5日間となりました。

誰もが最初は市民参加の舞台が、海を超えて台湾・新竹市の地で、しかも日本語で上演できるとは思っていなかったはずです。それは、今企画を考えて動き出したスタッフ達でさえ確信があったわけではなかったのです。

それでも、実際に公演が行えたのは、私達を信じて協力してくださった方々や支援してくださった企業に団体、そして応援してくれた人達がいたからです。この感謝をしてもしきれない程の多く

の「ありがとう」を伝えるにはどうしたらいいのだろう、そして、この想いを継ぐには・・・岡山に帰ってからそう考えている私達があります。

◆おわりに

平成26年4月29日の台湾新竹市での一夜は、私達やその空間を体験し、「共有」した人達にとって、本当に奇跡のような一日となりました。

そしてあの日、私達はこの一年間の企画にピリオドを打ちました。しかし、その途端にもう一度あの人達に会いに行きたいと思っている自分達がいるのです。

私達の「ありがとう」がちゃんと伝わったのかは分かりませんが、あの瞬間を「共有」した人達の中に何かを芽吹かせたことは確かです。

「台湾・新竹市、國際會議廳」で同じ時間を共有した全ての人の心の中に、この物語が深く刻まれている。そう信じてやみません。

そして、この色々な人の中に刻まれた物語は、いずれ蕾となって新たな行動を呼び起こすのです。

終わってはいません。これから始まるのです。多くの花を咲かせて岡山と台湾の花束を作るために・・・

岡山市・新竹市友好交流協定締結10周年記念「新竹市演劇公演」

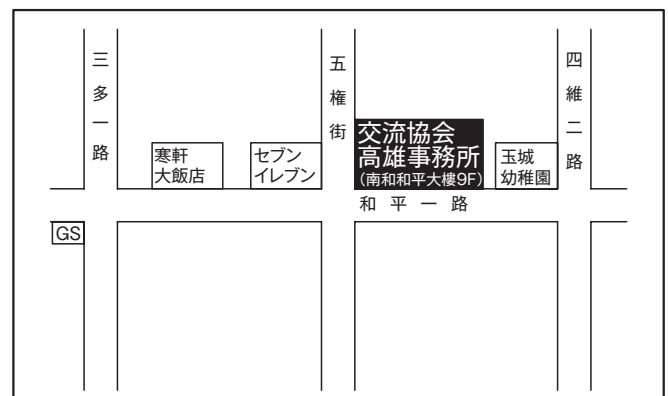
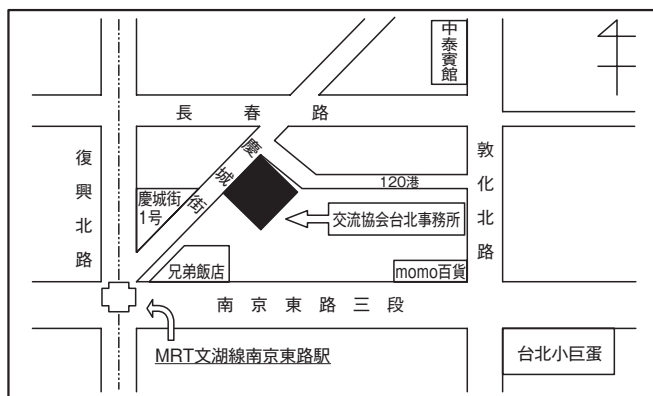
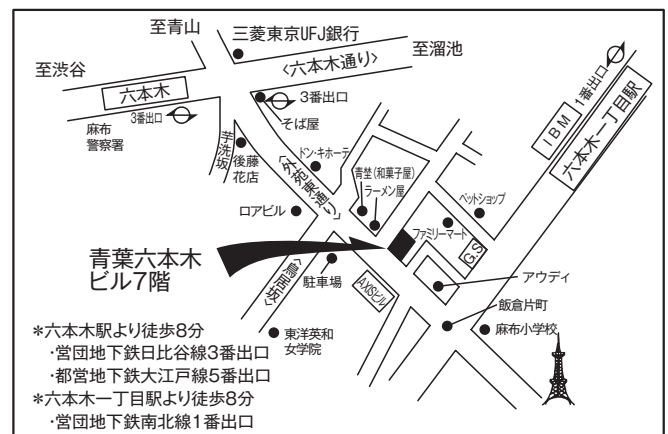
事務局一同

東京国立博物館で開催中の台北国立故宮博物院展に、初日に行って参りました。東日本大震災の被災地である宮城県、岩手県、福島県の高校生を元気づけたいとのことで、在日台湾大使館に相当する駐日台北経済文化代表事務所が各県から20名ずつを招待したのですが、当協会は生徒さんの紹介に協力させていただいたということで、一緒に鑑賞する機会を得たのです。前日のうちに東京に着き、朝8時に本館に集合した緊張した面持ちの60名の生徒さん。馮院長の「若い感性で素晴らしい芸術を吸収し、その感動を家族や友達に広げ、将来は大勢で台北の故宮博物院に来て欲しい」との挨拶に大きく頷いていました。続いて各県生徒が挨拶文を読み上げ、馮院長から記念品を受け取って感動的なイベントが終了。その後翠玉白菜を鑑賞し、185点もの美術品を鑑賞致しました。今、東京で、このような素晴らしい至宝の美を味わえる幸せ。これも日台双方が永年に亘って築きあげた信頼関係の賜であり、これこそが宝なのです。この宝を壊さないよう、大事に磨き続けていくことが、私達の役割なのだと感じ入った一日でした。(M,N)

交 流 2014年7月 vol.880

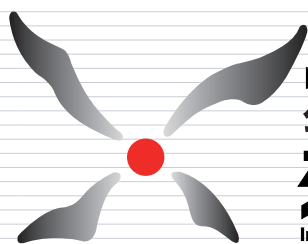
平成26年7月25日 発行
 編集・発行人 舟町仁志
 発行所 郵便番号 106-0032
 東京都港区六本木3丁目16番33号
 青葉六本木ビル7階
 公益財団法人 交流協会 総務部
 電話 (03) 5573-2600
 F A X (03) 5573-2601
 U R L <http://www.koryu.or.jp>

表紙デザイン：株式会社 丸井工文社
 印刷所：株式会社 丸井工文社



台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓
 Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st., Taipei
 電話 (886) 2-2713-8000
 F A X (886) 2-2713-8787
 URL <http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3.contents.nsf/Top>

高雄事務所 高雄市苓雅區和平一路87號
 南和和平大樓9F
 9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan
 電話 (886) 7-771-4008 (代)
 F A X (886) 2-771-2734
 URL <http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3.contents.nsf/Top>



日本と台湾との架け橋

公益財団法人

交流協会

Interchange Association, Japan (IAJ)

